

## 紀国寺慧浄の『法華經續述』考(1)

——新発見の史料をもとに——

金 炳 坤 (慧鏡)

### 一、はじめに

紀国寺慧浄 (CE.578-645<sup>(1)</sup>) の撰した『法華經續述<sup>(2)</sup>』(以下、『續述』) 十卷については、栖復集 (CE.879) 『法華經玄贊要集』(以下、『要集』) 巻第一に「今此講者。是後秦弘始七年。鳩摩羅什三藏。譯出妙法蓮華經七卷。或八卷。六萬九千七百五十四言也。然造疏。前後十九餘家。盛傳於世者。即天台紀國嘉祥慈恩也。天台疏名文句。紀國名讚述。嘉祥疏名義記。慈恩疏名玄贊。今之講者。即慈恩疏也。」(SZ.34 no.638 p.171b, ll.5-10) と、また、巻第六に「言淨法師者。紀國慧浄法師也。」(SZ.34 no.638 p.308b, l.23) とあるように、九世紀には、天台・三論・法相といった各宗派を代表する高僧達の著疏と肩を並べるほど、確固たる地位を確立していたようである。

憾むらくは現在『續述』そのものは散逸して伝わらないが、その盛行ぶりは、慧詳撰 (CE.VIII) 『弘贊法華傳』をはじめ、朝鮮半島では、義天録 (CE.1090) 『新編諸宗教藏總録』に、日本では、平祚録 (CE.914) 『法相宗章疏』・永超集 (CE.1094) 『東域傳燈目錄』・藏俊撰 (CE.1176) 『注進法相宗章疏』などの書目<sup>(3)</sup>に記載されるとおりであり、法華章疏にあっては、基 (CE.632-682) 撰『妙法蓮華經玄贊』・義寂 (CE.VII-VIII) 積義一撰『法華經論述記』(以下、『論述記』)・敦煌文書の『法華問答<sup>(4)</sup>』(以下、『問答』)・智雲 (CE.VIII) 撰『妙經文句私志記』・從義 (CE.1042-1091) 撰『天台三大部補注』

などからその引用が散見される。とくに、前掲の『要集』のなかには、「紀国(云)」八十一箇所・「(慧)浄法師(疏云)」八箇所と、引用の確認できる章疏のなかでもその引用回数が最も多く、そのため慧浄の法華経観並びに彼の著『續述』の一端を知りうる恰好の史料といえる。

## 二、新発見史料の検討

本稿で取り上げるスタイン蒐集の敦煌文書 [S.6494] は、幾多の目録<sup>(5)</sup>によって、すでに知られたとおり、作者未詳・不知題の『法華経疏』である。しかし、翻刻公刊されていないためか管見の及ぶ限り、関連研究は皆無といってよい。したがって本稿では、散逸した慧浄の『續述』と密接なつながりのある本史料を学会に提供するために、一、当該写本の翻刻を行うことと、人師の名<sup>(6)</sup>が見当たらない当該写本の成立事情を解明するために、二、経典・論書からの引用箇所を明確にすることをその目的とする。

当該写本は、その影印が『敦煌寶藏』第47冊に収録されており、そのタイトルに「斯六四九四號 妙法蓮華経論義第一品至第三品(擬)」(p.422)とあることから、本稿ではこの書名を採用し、以下、略称して『論義』とする。

『妙法蓮華経』との対応関係について、四九五行からなる『論義』に見られる『妙法蓮華経』の最初の経文は、序品の「僧祇劫爾時」(T.9 no.262 p.3c, l.18・S.6494 p.1, l.2, l.4)であり、最後の経文は、譬喩品の「輩交横馳走」(T.9 no.262 p.13c, l.26・S.6494 p.26, l.495)である。

論述形式については、一品が完備する方便品に関してのみいえば、『妙法蓮華経憂波提舍』(以下、『法華論』)の科段に準じた、『法華論』の主要タームが満遍なく見出される、そして地の部分においては、既知の注釈書とは異なり、独自の解釈が施された、いわば、『法華論』の新たな注釈書ともいうべきものである。とくに、方便品のはじめの部分までが現存している『論述記』の場合、序品の釈文において「浄(法)師云」として、慧浄に帰される説が三箇所に引

用<sup>(7)</sup>されているが、『論義』には、序品の前半ほとんどが欠損しているため、これを対比しえない。ともあれ、このことから、『法華論』に対する慧浄のコメントリーが存したことが推測できる。

慧浄の現存書並びに散逸した『續述』との関連性については、慧浄述『阿彌陀經義述』(S.6494 p.3, ll.43-44)と、惠浄撰<sup>マテ</sup>『溫室經疏』(S.6494 p.3, l.60)とにほぼ一致する文例が見られ、かつ『要集』に引かれている慧浄の説ともほぼ一致する文例(S.6494 p.3, l.56 - p.4, l.65, p.22, ll.419-422)が多数確認できる。ただし、譬喩品に、道世撰(CE.668)『法苑珠林』と類似(S.6494 p.23, l.442 - p.24, l.456)する文例<sup>(8)</sup>が見出されることから、『論義』は、慧浄の『續述』そのものではなく、おそらく、それ以降に『續述』をベースにして製作された「敦煌の修治本」と看做したほうが妥当であると考えられる。しかしながら、アビダルマ論書からの引用(類似文例を含む・S.6494 p.4, ll.78-80, p.10, ll.197-198, p.12, ll.227-229)は、玄奘(CE.602-664)の新訳ではなく、旧訳に類似することが指摘できる。

特筆すべきは、同じく敦煌文書である『問答』と『論義』とでは、共通する文例が数多く見られることである。なお、その傾向は譬喩品の「法華七喩」の釈文においてさらに顕著になる。しかしながら、同文例を有する両者の先後関係<sup>(9)</sup>は、現段階では判断できない。また、『論義』の翻刻による印象からすると、両者は互いの誤字脱字を補い合えるような相互補完関係にあるように見え、下敷きとなったなんらかの文献〔=『續述』・「敦煌の修治本」〕があって、それを適宜に書き写したものの如くである。すなわち、両者はその素材において同様のものが使われていた可能性が極めて高い。したがって、以下のような展開を想定することができる。

『續述』 → 「敦煌の修治本」 → 『問答』・『論義』

以上、先述してきた諸相により、スタイン蒐集の敦煌文書[S.6494]の素材

こそが、散逸して伝わらない慧浄の『法華經續述』であると推論することができるのである。

以下、本稿では『論義』の序品及び方便品まで (S.6494 p.13, L.243) の翻刻を掲載し、譬喩品の翻刻及び異体字一覧を含む研究編は次稿に譲りたい。

### 【凡例】

一、当該写本の翻刻には、『敦煌寶藏』第47冊の422頁から434頁までに収録されている影印を使用した。また、原文の漢字は既刊書との比較検討の便宜をはかり、可能な限り旧字体に改めた。

一、引用文献・文例の調査に当たっては、とくに、慧浄の現存書・『法華經玄贊要集』・『法華問答』に重点をおき、本文に対応する經典・論書からの引用箇所はその原文を註に、また、該当箇所には下線を引いた。

一、原文の翻刻に用いた符合は以下のとおりである。

「P.13\_242(23)」 — (P.13 — 影印の頁数 (各頁の\*の附いた行が頁の始まりである)。<sub>242</sub> — 合計四九五行中二四二行目。(23) — 行の文字数。)

□ — 欠損・破損のために判読できない文字。○ — 判読できない文字 (異体字など)。々 — 原文のおどり字 (すべて補って記した)。レ — 写経者による返り点。{ } — 写経者による添字。[ ] — 筆者による補填。

### 三、序品

P.01\_001(02) : □□

P.01\_002(09) : <sup>(9)</sup>僧祇者 此云不可數□

P.01\_003(11) : 阿僧祇劫 復數阿僧祇劫<sup>[13]</sup>□

P.01\_004(16) : <sup>(10)</sup>爾時有佛 名日月燈明佛 下言希也 至□

P.01\_005(20) : <sup>(11)</sup>上根因之以得[道]如日明 中根因之以得道如月明<sup>[下]</sup>□

P.01\_006(20) : <sup>(12)</sup>如實道來故名如來 應受供養故名應供 智不顯<sup>[例]</sup>□。



- P.01\_007(25) : 戒定慧具名明行足 不還生死名爲善逝 知世間解相名{世}間解
- P.01\_008(25) : 解 善說安穩道名無上士 以三乘法度人名調御丈夫[天]人師 能覺
- P.01\_009(22) : 煩惱睡故名佛 最上處住名世尊 <sup>(13)</sup>演說正法 初中後善者
- P.01\_010(21) : 初善聞時生信也 中善思時生喜也 後善脩時生覺也
- P.01\_011(22) : <sup>(14)</sup>其義深遠者 深合世帝 <sup>(15)</sup>其語巧妙者 巧則易受 妙則易解
- P.01\_012(25) : <sup>(16)</sup>純一無雜者 所生行體外道無 純一佛法 故言無雜 <sup>(17)</sup>具足清白者
- P.01\_013(25) : 斷惑圓故具 凡夫不能斷故 在學身中爲清 白性淨故 無學身 <sup>[中]</sup>
- P.01\_014(25) : 爲白 無垢淨故 <sup>(18)</sup>梵行之相者 梵涅槃由清淨故 行是道諦趣涅 <sup>[弊]</sup>
- P.01\_015(24) : 故 道是梵家行體 故名相 <sup>(19)</sup>姓頗羅墮者 此云利根 <sup>(20)</sup>時會聽者 <sup>[亦]</sup>
- P.01\_016(24) : 坐一處 六十小劫身心不動 聽佛所說謂如食頃者 <sup>(21)</sup>智度論云
- P.01\_017(24) : 菩薩論云有不可思議云三昧 令多時作少解 少時作多解 <sup>(22)</sup>此
- P.01\_018(28) : 三昧有三 能一轉色不轉心 二轉心不轉色 三轉色亦轉心 一轉色不轉
- P.01\_019(24) : 心者 如變大地爲金銀 <sup>[覆]</sup>如改海水爲 <sup>[蘇]</sup>酪 <sup>[地]</sup>池水 實轉衆生心不
- P.01\_020(27) : 轉 而得取爲受用 二轉心不轉色者 如申七日以爲一劫 令謂一劫或
- P.01\_021(28) : 促一劫爲七日 令彼謂爲七日 此轉心時無體故 如中山美酒一醉千日
- P.01\_022(26) : <sup>[?] ]</sup>○謂一寢已歷三年 <sup>[載]</sup>此即以酒轉心以長爲短 <sup>(23)</sup>下經云 有人好夢見
- P.02\_023(26) : 作佛千萬億劫 爲衆生說法 此即以夢轉心以短爲長 況聖人神力
- P.02\_024(26) : 轉心也 <sup>(24)</sup>三轉色亦轉心者 如彌須入芥子無所增減 須彌入芥子 <sup>[是]</sup>

- P.02\_025(24) : 轉色無所增減 是轉心轉色謂大色爲小色 轉心謂衆生作<sup>[須]</sup>
- P.02\_026(24) : 彌解 <sup>(25)</sup> 智度論說 脩多羅與帝釋戰敗 遁入藕絲孔中 又曰外道
- P.02\_027(24) : 梵志非有智慧 直以藥草呪術能轉人心 案脩羅能轉大色爲
- P.02\_028(23) : 小色 梵志能轉善心爲惡<sup>[心]</sup> 況菩薩神力轉於色心 豈爲難也
- P.02\_029(26) : <sup>(26)</sup> 然若色若色 二各有三轉自 或轉自不轉他 不轉自 或他<sup>自</sup>俱轉隨
- P.02\_030(25) : 益不定 今言六十小劫 謂如食頃 謂如食頃者 是轉心不轉色 於
- P.02\_031(27) : 轉心中是自他俱轉 佛轉自心六十劫解 多時說法華故 復轉他心作
- P.02\_032(23) : 食頃解 不違衆生壽限故 如此等事並不可思議 <sup>(27)</sup> 多[陀]阿伽度
- P.02\_033(22) : 者 如來阿羅<sup>[呵]</sup> 此云應供 三藐三佛陀者 此云爲正遍知

#### 四、方便品

- P.02\_034(10) : 妙法蓮華經方便品第二
- P.02\_035(26) : <sup>(28)</sup> 自下一十九品明經體 方便一品標宗 略說爲利根 故後八<sup>十</sup>品開
- P.02\_036(24) : 宗 廣說爲鈍根 方便者 立教正直爲方善遍機宜爲 便此品略
- P.02\_037(26) : 讚法師四德 廣引弟子三根發二執之近疑敵一道之幽路 卽此如
- P.02\_038(27) : 來立大<sup>[方]</sup> 便故以爲名此品 <sup>(29)</sup> 論開五分 破二明一 案五分 <sup>(1)</sup> 一歎法分 <sup>(2)</sup> 二
- P.02\_039(25) : 歎師分 <sup>(3)</sup> 三疑請分 <sup>(4)</sup> 四授記分 <sup>(5)</sup> 五斷疑分 <sup>(1)</sup> 一歎法分者 標所明之 <sup>(2)</sup> 二[歎]
- P.02\_040(25) : 師分者 亦能明人<sup>[之]</sup> 疑<sup>[之]</sup> <sup>(3)</sup> 三請分者 卽所破之 <sup>(4)</sup> 四[機授記分者] 亦能
- P.02\_041(26) : 破執之一道 <sup>(5)</sup> 五斷疑分者 總定時處通明受 五分既周則一乘略現
- P.02\_042(20) : 故曰五分破二時一 <sup>(30)</sup> 爾時世尊從三昧安祥而起者

- P.03\_043(21) : 起由自力無能<sup>[續]</sup>○動故曰安祥 告舍利弗者<sup>(31)</sup>身子雄才
- P.03\_044(24) : ○<sup>[?][興]</sup>神慧○<sup>[類]</sup>悟 告者 往也 如來一問<sup>[問]</sup>千解是故告也 不告菩薩
- P.03\_045(23) : 舍利爲授聲聞記也<sup>(32)</sup>諸佛智慧甚深無量者 歎證法也 唯佛
- P.03\_046(25) : 獨有名智慧餘人不測名深無量 其智慧門難解難入者 一切聲
- P.03\_047(22) : 聞辟支佛所不能知<sup>(11)(33)</sup>下歎教法 教能生智名智慧門 聲聞
- P.03\_048(25) : 緣覺散心不解定心不入即不共甚深同也 所以何<sup>[レ]</sup>者 佛曾親近
- P.03\_049(19) : 百千萬億無數諸佛者 承力持經即<sup>1</sup>讀誦甚深也
- P.03\_050(23) : 盡行諸佛無量道法者 依經進道即<sup>2</sup>脩行即甚深也 勇猛精
- P.03\_051(23) : 進者 進道果緣即<sup>3</sup>果行甚深 名稱普聞者 果名流振誦者 福<sup>[2]</sup>
- P.03\_052(24) : <sup>4</sup>增長功德心甚深也 成就甚深未曾有法者 所得未曾屬於樂
- P.03\_053(22) : 道即<sup>[快]</sup>決妙事心甚深也 隨宜<sup>[所]</sup>說法意趣難解者 體授法如
- P.03\_054(24) : 石投水即<sup>7</sup>入甚深也 舍利<sup>[弗]</sup>吾從成佛已來者<sup>(2)(34)</sup>下歎師德四
- ①一住
- P.03\_055(27) : 成就<sup>②</sup>二教化成<sup>[就]</sup> ③三功<sup>[德]</sup>成就四畢竟成就<sup>④</sup>四說成就
- ①<sup>(35)</sup>此歎住成就 住者 趣
- P.03\_056(26) : 也 吾<sup>[從]</sup>德成佛已來者 住也 即神通化若衆生善根漸積心水梢登者
- P.03\_057(26) : 佛感而遂通 惠日斯應 所以上退一生 下流八相 爲三病之良醫
- 作
- P.03\_058(22) : 四之慈父 斯爲身住也 種種因緣 種種譬喻 廣演言教者
- P.03\_059(23) : 口住也 即說法化前雖身<sup>[レ]</sup>現丈六 但可觀相生善 若不<sup>[不]</sup>教
- P.03\_060(24) : 弘九部 無以憑答取悟所以<sup>(36)</sup>暢四辯於舌端 流八音於聽表 開
- P.03\_061(24) : 三乘之正路 塞師之<sup>[邪]</sup>耶轍欲 使之者 識是以知 非行之者 從善
- P.03\_062(21) : 而棄惡 斯爲口住也 無數方便引道<sup>[導]</sup>衆生令離<sup>[著]</sup>諸着者
- P.04\_063(22) : 住也 即與念化前雖口業說法只得薄薄開其解若不意
- P.04\_064(24) : 道<sup>[密]</sup>密加由漸進其行是故更加之以二力進之以位欲使未得
- P.04\_065(20) : 功德念念而增 脩已得功德新新而不退 斯爲住也

- P.04\_066(21) : 所以者何 如來方便知見波羅密<sup>[66]</sup>皆已具足者 ②此歎教
- P.04\_067(23) : 化成就也 教化以六通爲方中五通是天眼是見此皆具足
- P.04\_068(21) : 故教化成就 舍利弗 如來知見廣大深遠 無量無礙力
- P.04\_069(20) : 無所畏 禪定解脫三昧者 ③嘆功德畢竟成就也 前是
- P.04\_070(21) : 見化智今見知是證智照無不遍 故言廣 超邁下乘 故
- P.04\_071(20) : 言大 二乘不能窮其底 故言深 菩薩未亦通其際 故
- P.04\_072(21) : 言遠 無有量已過量 故言無量 礙已盡無礙 故言無礙
- P.04\_073(24) : 此是證體力是十力無畏是四無畏此是證果(禪)之解脫三昧
- P.04\_074(20) : 此是證因證體成故言惑郭盡也 能伏聲聞緣覺證
- P.04\_075(20) : 果成故智郭盡能伏天魔外道證因成定郭盡能爲
- P.04\_076(23) : 二智依處是名功德畢竟成就 深入無際 成就一切未曾有
- P.04\_077(22) : 法<sup>4(37)</sup>下說成就也 自有六章 此歎法門成就也 無際者 謂法
- P.04\_078(21) : 界 是法門生因離前際中 故言無際<sup>(38)</sup> 聲聞如兔<sup>[5]</sup>度河 是
- P.04\_079(23) : 淺入 緣覺如馬<sup>[?]</sup>度河 是中入 如來鴻<sup>[?]</sup>度河 是爲深入 深[入]無際
- P.04\_080(23) : 者 證理也 成就一切者 流教也 舍利弗 如來能種種分別巧
- P.04\_081(22) : 說諸法 言辭柔軟悅可衆心者 ②此歎言語成就也 如來內
- P.04\_082(24) : 有無礙之智外有無方之辭於能一義立無<sup>[覺]</sup>{○}義名能以一名
- P.05\_083(23) : 說無量義 故言種種分別 引事比方轉其刑勢辭<sup>[?]</sup>{○}成易談<sup>[?]</sup>
- P.05\_084(23) : 深即淺 是爲巧說諸法 聲和字句流轉成文 故曰言辭 韻調
- P.05\_085(20) : 含咀溫潤稱爲柔軟 聞者心欣而悅 無所彈斥爲可
- P.05\_086(22) : 舍利弗 取要言之 無量無邊未曾有法 佛悉成就 止舍利
- P.05\_087(24) : 弗 不須復說者 ③此歎相[成]就也 止舍利弗 以唱說相 其猶鳥飛  
伏
- P.05\_088(24) : 獸擲必縮 以取勢故如來亦爾欲說先止以要請故 未曾[有法佛]無  
成[就]
- P.05\_089(24) : 者<sup>(39)</sup>五唱<sup>[11]</sup>正由不須說者 即要請之相開如來智周萬物慈洽 四

- P.05\_090(22) : 生何不當機而即說更唱止以要請耶 答洪鐘雖響 必得
- P.05\_091(22) : 擊而方鳴 大聖雖慈 亦因請而方說 若無請而說 或自讚
- P.05\_092(23) : 之譏有請方談令生企道之教 <sup>〔40〕</sup>問 若示菩薩不請之久如來
- P.05\_093(22) : 無問自說 <sup>〔41〕</sup>既相銜梢何以會通 答 此爲至道幽道微因知
- P.05\_094(22) : 和寂 <sup>〔9〕</sup>故爲開基而略說生其疑路以來請耳 <sup>〔39〕</sup>問 摩可般若
- P.05\_095(22) : 窮實相之彼岸 大般涅槃究佛性之源底 妙法蓮華盡一
- P.05\_096(22) : 乘之至於混實 則同曰絕名會答 則俱稱難解 何以摩訶
- P.05\_097(24) : 般若 則無問而自說 大般涅槃 則端拱而待請 至於妙法蓮華
- P.05\_098(24) : 初則自說 後更待請 答 旨趣齊雖 而汲引不一 此由衆生根有
- P.05\_099(25) : 利鈍致使如來說有柳揚所請 <sup>〔42〕</sup>殊途同歸百慮一致者也 所以者
- P.05\_100(25) : 何 佛所成就第一希 [有難解之]法者 <sup>〔4〕</sup>此歎堪成就也 佛所成就  
故知佛能說
- P.05\_101(23) : 難解[之]法 故我須請 唯佛與佛乃能究盡諸法實相者 <sup>〔5〕</sup>此歎無
- P.06\_102(24) : 量種成就也 實相是如來藏 餘人不能究盡 <sup>〔43〕</sup>何以故 凡夫如盲
- P.06\_103(24) : 不見衆色 二乘如七日嬰兒不見日輪 <sup>〔44〕</sup>如行菩薩 如眼病人見
- P.06\_104(24) : 兩月 初七地菩薩 有出入觀異如夜電光 彼三地菩薩 礙郭未
- P.06\_105(21) : 盡如羅繫中視佛 地菩薩大明如淨眼見色 是故唯佛
- P.06\_106(23) : 究盡乃堪說法 所謂諸法如是相 [如]是性 如是體 如是力 如是
- P.06\_107(21) : 作 如是因 如是緣 如果 是 如是報 如是本末究竟等者
- P.06\_108(25) : <sup>〔7〕</sup>此歎隨順衆生意成也 就 如來悉知一切法 有此十事 故欲隨順
- P.06\_109(24) : 衆生意說法 如佛知見無相爲相 無分別智爲性 唯一佛乘爲
- P.06\_110(23) : 體 能破煩惱爲力 教化衆生爲作 正聞薰習爲因 甚深法性
- P.06\_111(21) : 爲緣 化身爲果 應身爲報 同類因爲本 流果爲末 清淨
- P.06\_112(22) : 爲究竟 <sup>〔45〕</sup>爾時大衆中有諸聲聞衆 <sup>〔39〕</sup>下第三[疑]請分也 開宗者
- P.06\_113(22) : 無說 唱止者 欲令致請 前既開宗 而唱止 今待請竟 而方
- P.06\_114(25) : 說是 故疑請也 <sup>〔46〕</sup>論有三決定義 <sup>〔1〕</sup>一決定義 <sup>〔2〕</sup>二疑義 <sup>〔3〕</sup>三依義



何事疑

- P.06\_115(24) : 義案決者<sub>レ</sub>定 依自解脫 故疑請也 起依何事者 依如來說起 佛
- P.06\_116(25) : 說一解脫義我等亦得此法到於涅槃者 <sup>①</sup>決[定]義也 [佛]說一解脫[義]者 是
- P.06\_117(24) : 聖言量 我等亦得者 是證由此二量 起<sub>レ</sub>故決定智 而今不知是
- P.06\_118(23) : 義所趣者 <sup>②</sup>疑義也 前說解脫不同異 今說智惠不同 故知也
- P.06\_119(26) : <sup>(47)</sup>爾時舍利[弗]知四衆心疑 自亦未了者 <sup>③</sup>依何事疑[義]也 昔說二解不同 依
- P.06\_120(24) : 於昔同疑於今異 依於今異疑[於]昔同 同異不定所以疑而不了
- P.06\_121(26) : <sup>(48)</sup>爾時佛告舍利弗 止止不須復說 [若說]是事 一切世間諸天及人皆當驚
- P.07\_122(28) : 疑 <sup>(4)</sup>下第四授記分也 <sup>(49)</sup>論云 自下依四事說 <sup>①</sup>一決言 決{心}與記也 <sup>②</sup>二因授言
- P.07\_123(26) : 因生疑也 <sup>③</sup>三取授記言 根熟者 取也 <sup>(4)</sup>四與授記言 與也 此止引其力 <sup>[正]</sup>
- P.07\_124(24) : 因 止止不須[復]說者 <sup>①</sup>即顯決定意 令取爲斷 五怖爲利二人 故如
- P.07\_125(24) : 來有決定心 五怖者 <sup>①</sup>一損驚怖 謂定性聲聞 此人昔聞小 即尋
- P.07\_126(23) : 聲以計實 今曰聞大 便謗有以爲無 無謗在壞曰損有違 其
- P.07\_127(24) : 驚怖也 <sup>②</sup>二多事驚怖 <sup>(50)</sup>謂退菩提心聲聞 此人本發大心怖求大
- P.07\_128(24) : 果中間須行八萬四千波羅<sup>[密]</sup>密行 復經三大阿僧祇劫時 雖<sup>[?]〇</sup>
- P.07\_129(23) : 玄鼓掉於流法長波而自息 故曰多事驚怖也 <sup>③</sup>三顛倒驚怖
- P.07\_130(23) : 謂外道凡夫 法實空寂 本來無我 無我計我 曰倒聞說 無我
- P.07\_131(22) : 即驚 故曰顛倒驚怖 <sup>(4)</sup>四[心]悔驚怖者 謂應化聲聞 斯乃權行
- P.07\_132(24) : 大士情存 引物實非小 而言雖不悔 而言悔就迹 而談此悔 即
- P.07\_133(24) : 是怖 故曰[心]悔驚怖也 <sup>(5)</sup>五誑驚怖 謂增上慢聲聞 此人聞如來



權

- P.07\_134(26) : 言昔是今 復言非翻是作 此謂(語)爲誑生怖 故曰誑驚怖也 二人者
- P.07\_135(24) : 卽多事驚[怖心]悔驚怖人也 斷怖約通記 及五人利益約別記 故唯
- P.07\_136(23) : 二種<sup>○</sup>問 斷怖之與利益若爲深淺 而斷怖約通記 利益約別
- P.07\_137(23) : 記 答 斷怖者 密興結緣 信者 亦結緣 不信者 亦結緣 不信者
- P.07\_138(24) : 亦結緣淺 所以通記 利益者 顯授其果 根熟者 可示 未熟者 不
- P.07\_139(22) : 示深故 所以別記<sup>○</sup>問 根熟者 得益 可言斷怖 未熟者 無益
- P.07\_140(22) : 無益云何怖斷 答 根未熟者 初卽許其在痊 此謂<sup>[?]2]</sup>已結前
- P.07\_141(22) : 緣今復擯之令出更是防其後謗由結前緣終<sup>[?]權]</sup>○超勝之
- P.08\_142(22) : 變由防後謗交兎墮陷之災息慶未寧非怖斷<sup>○</sup>問 如來擯
- P.08\_143(24) : 之令出可塞五千之謗 善根對而宣揚應成勝意之罪 答 諸佛
- P.08\_144(23) : 則曉見機必知去而無謗所以擯之令出菩薩尚濛籠<sup>[?]權]</sup>○境
- P.08\_145(24) : 未測去而無罪由對面宣揚且復去住俱起記謗則測對而宣
- P.08\_146(24) : 揚住謗去不謗 是應擯之令出 若說是事 一切世間[諸]天[及]人阿脩
- P.08\_147(21) : 羅皆當驚疑者<sup>○</sup>此顯<sup>(51)</sup>因授記 謂因佛授記 而生驚疑也
- P.08\_148(23) : <sup>○</sup>問 前來未曾授記驚怖何因而生 答 歎妙法功德以開破二
- P.08\_149(26) : 之宗今復止之令取卽是明一之相破二明一 卽與通記雖別授且
- P.08\_150(25) : 足相 驚意有三 一令根熟者 重法 二令根熟者 重人 [三]令未{熟}者 避
- P.08\_151(20) : 席 舍利弗言 唯願之<sup>レ</sup>說 是會無數衆生 曾見諸佛 聞
- P.08\_152(22) : 必受者 舉因請也 論曰 第二請 示現過去無量[諸]佛教化衆
- P.08\_153(19) : 生<sup>(52)</sup>[佛]復止舍利弗 若說是事 增上[慢]比丘將墜[於]大坑者
- P.08\_154(23) : 引其緣力也 前止杜其驚疑之怖 今過其墮陷之災 大坑阿

- P.08\_155(21) : 鼻獄也 今身起謗來生必墮 故言將墮由能謗之罪既
- P.08\_156(19) : 深則所墮之坑 亦大恐生謗墮坑 故止而不說也
- P.08\_157(22) : <sup>(53)</sup>爾時舍利弗言 <sup>(54)</sup>唯願說之今此會中 如我等比 世世已來
- P.08\_158(19) : 曾[從]受<sub>レ</sub>佛化 必能[敬]信受者 舉緣請也 謂現佛前舉過
- P.08\_159(20) : 去佛若遠取之即大通智勝今舉現在佛若近取之
- P.08\_160(20) : 即釋迦牟尼智勝乃分結前緣 已謝宜因力釋迦 即
- P.09\_161(23) : 今方攝化對自可以明緣 而言世世已來從佛受化者 釋迦
- P.09\_162(21) : 曾是菩薩 無始以要終 舉過以明現耳 故論三請示現
- P.09\_163(19) : 在佛教化衆生 <sup>(55)</sup>爾時世尊告舍利弗 汝以慇懃 三
- P.09\_164(17) : 請 豈得不說 至舍[利]弗[言] 唯然世尊 願樂欲聞者
- P.09\_165(21) : 此明授記 <sup>(56)</sup>取[授]記者 願樂義如來將較授之唱 先述取記
- P.09\_166(20) : 懷<sub>レ</sub>之既府遂啓所以高勝願樂如來許說即許與身
- P.09\_167(20) : 子願樂即止取心求得決爲願情無退陷爲樂覺得
- P.09\_168(22) : 方便爲欲一心注聽爲此正取記也 <sup>(57)</sup>[佛告]舍利弗如是妙法 <sup>(4)</sup>下
- P.09\_169(22) : <sup>(58)</sup>與授記也 論有六章 ①一未聞[令聞] ②二說 ③三者依[何等]義  
④四者令[住] ⑤五者
- P.09\_170(20) : 依法 <sup>(6)</sup>六者遮 ①此明未聞令聞也 如是妙法者 下與授
- P.09\_171(21) : 記 舉所開之此顯未聞 時乃說之者 演以爲三此顯令
- P.09\_172(20) : 聞所謂人壽百歲之前玄音尚靜 故曰未聞 五濁變<sup>(?)</sup>
- P.09\_173(22) : 浸之後法雷如震 故曰令聞 故下云 劫濁亂時衆生垢重
- P.09\_174(21) : 於一佛乘分別[說]三 然靈山已[前]是權時 靈山已後是顯時
- P.09\_175(18) : 實 今是行權時也 優曇鉢羅華者 靈華也 輪華
- P.09\_176(20) : 王出世靈華乃現諸佛出世法華方開靈華現故未
- P.09\_177(19) : 見者 令見法華開故未聞者 聞 汝等當信 佛之所
- P.09\_178(20) : 信 佛之所說言不虛妄者 佛所說故未聞者 令聞言
- P.09\_179(20) : 不虛者故未信者當信 舍利弗 諸佛隨宜說法 至唯

P.10\_180(18) : 有諸佛乃能知之者 <sup>②</sup>正說也 說三〇一言近意

P.10\_181(23) : 非思量[分別]之所能解 所以者何 諸佛世尊 唯以一大事因緣[故]出

P.10\_182(23) : 現於世者 <sup>③</sup>依義也 雖復說三爲一出耳 一大事者 謂佛知見

P.10\_183(22) : 濶度一切事爲大也 開示悟入者 依四義說 <sup>〔開〕</sup>聞者依<sup>①</sup>無上

P.10\_184(22) : 義 一切智唯佛獨有 開此智見 開一乘果也 示者依 <sup>②</sup>同義

P.10\_185(24) : 佛性法身三乘同有 示此知見 示一乘體也 悟者依 <sup>③</sup>不知義 不

P.10\_186(22) : 知真實處 悟此知見 悟一乘體也 入者 依 <sup>④</sup>不退義 與無量

P.10\_187(22) : 智業 入此知見 入一乘因也 所爲衆生 卽一乘攝 如是四

P.10\_188(21) : 義 一開覺體 二示覺緣 三悟覺體 四入覺因 故論曰 一

P.10\_189(20) : 佛乘道者 依四義說應知 <sup>(59)</sup>舍利弗 如來但[以]一佛乘故

P.10\_190(19) : 爲衆生說法 無有餘乘若二若三者 <sup>④</sup>令住也 已於

P.10\_191(20) : 三令住一 若二是第二緣覺乘 若三是聞聲乘 <sup>尊</sup> <sup>(91)</sup>〇

P.10\_192(18) : 次第 則佛乘爲第一 緣覺爲第二 聞聲爲第三

P.10\_193(24) : 舍利弗 一切十方諸佛法亦如是者 <sup>⑤</sup>依法也 凡是佛法先進三

P.10\_194(21) : 後令住一 <sup>(60)</sup>舍利弗 十方世界中尚無二乘 何況有三者

P.10\_195(21) : <sup>⑥</sup>遮二也 尚無第二 況有第三 <sup>(61)</sup>舍利弗 諸[佛]出於五濁惡世

P.10\_196(23) : <sup>(5)</sup>下第五斷疑[分]也 <sup>(62)</sup>有四種 <sup>①</sup>此斷說時疑也 疑曰前說 如是妙法

P.10\_197(23) : 時乃說之 何時說也 <sup>(63)</sup>今明濁時世說 <sup>(64)</sup>五濁者 依俱舍論 次第

P.10\_198(22) : <sup>①</sup>一命 <sup>②</sup>二劫 <sup>③</sup>三煩惱 <sup>④</sup>四見 <sup>⑤</sup>五衆生 <sup>①</sup>命濁者 壽命短也 <sup>②</sup>劫濁者

P.10\_199(21) : 衣食薄也 <sup>③</sup>煩惱濁者 三毒盛也 <sup>④</sup>見濁者 五見猛也 <sup>⑤</sup>衆生

P.11\_200(23) : 獨者 色心劣也 <sup>①</sup>命獨 故損{減}命體 <sup>②</sup>劫濁者 故損減命緣 <sup>③</sup>煩惱

P.11\_201(20) : 獨 故損減在家人善法 <sup>④</sup>見濁者 故損減出家人善法

- P.11\_202(22) : ⑤衆生濁者 故損減自身八德 一長量 二好色 三無病 四氣  
P.11\_203(23) : 力 五正智 六正念 七正勤 八不動 由命等五事俱下 故名爲  
P.11\_204(21) : 獨 劫濁亂時者 人壽千歲以還是劫濁 千歲以上非劫  
P.11\_205(25) : 獨 百歲以還(是)時<sub>[レ]</sub>亂 百歲以上非亂時 於一佛乘分別說三者  
於  
P.11\_206(24) : 開二以足一爲三 一外別三也 舍利弗 若我弟子 自謂阿羅漢  
P.11\_207(23) : 者 ②下斷<sub>[レ]</sub>慢疑 疑曰一音唱許 五千離席 既不爲說 云何知  
P.11\_208(22) : 是增上慢人 今明五千之徒 未得阿羅漢 自謂已得 知是  
P.11\_209(22) : 增上慢人也 不聞不[知但教]化菩薩事者 前聞唱止即心驚 後聞  
P.11\_210(20) : 增上慢人許說身退既心驚 身退則耳塞神昏 豈聞  
P.11\_211(21) : 知也 ⑥<sup>(65)</sup>所以者何 若{實}得阿羅漢 不信此法 無有是處者  
P.11\_212(25) : 實得者 信也 有四種 一信知 如聞火知火 二比丘[知] ⑥<sup>(66)</sup>如見烟  
知火 三[賢]  
P.11\_213(25) : 證知 如見火知火 如觸火知火 信知十信 比[丘]知三賢證知十地  
知  
P.11\_214(23) : 如來 ①<sup>(67)</sup>問 定性聲聞 亦信一乘 何不與記 答 仰信而未解 根未  
P.11\_215(20) : 熟故 而未與記 除佛滅[度]後現前無佛 至若遇餘佛 於  
P.11\_216(23) : 於此經中便得決了者 ③此斷說疑 [疑]曰 前云若說是事上慢墮<sub>[釋]</sub>  
P.11\_217(23) : {坑}則墮坑由乎 起謗起謗由乎 佛宣若聞道生信 即有堪能<sub>[釋]</sub>  
P.11\_218(22) : 如其起謗 寧成化主今明 佛若爲說則彼不起謗說起謗  
P.12\_219(21) : 不爲說非佛各也 若遇餘佛者 或是別佛 或是釋迦變<sub>[答]</sub>  
P.12\_220(23) : 名 如化城品說 ⑥<sup>(68)</sup>我於餘國作佛 更有異名也 舍利弗 汝[等]當  
二  
P.12\_221(22) : 心信解授持佛語 諸佛如來言無虛妄 無有餘乘唯一佛<sub>[受]</sub>  
P.12\_222(22) : 乘者 ④此斷妄語疑 疑曰 如來昔有三 若昔三爲實 則爲虛  
P.12\_223(21) : 今一爲實 則昔三爲虛 虛實既不定 云何如來不成妄

- P.12\_224(21) : 語 今明 昔三爲權 今一爲實 虛實雖異 爲益則因 故非
- P.12\_225(24) : 妄說 故汝當理無二 故唯一乘 <sup>(69)</sup>或說脩多羅 伽陀及本事 本生
- P.12\_226(20) : 未曾有 亦說於因緣 譬喻并祇夜 優波提捨經 此偈
- P.12\_227(22) : 爲聲<sup>(70)</sup>九部經 <sup>(71)</sup>具論有十二部經 ①一脩多羅 ②二祇夜 ③三和伽
- P.12\_228(23) : 那<sub>[レ]</sub>羅 ④四伽陀 ⑤五優陀那 ⑥六尼陀那 ⑦七[阿]波陀那 ⑧八伊  
帝<sup>[H]</sup>曰多伽
- P.12\_229(24) : ⑨九闍陀伽 ⑩十毗佛略 ⑪十一阿陀<sub>[レ]</sub>浮達摩 ⑫十二優波提舍經 ⑬  
脩多
- P.12\_230(23) : 羅 此云契經 契理機故 ⑭祇夜 此云重頌 亦曰等頌 覆疏長行
- P.12\_231(21) : 故名重 <sup>(72)</sup>義不越本 故言等 美前事義故言頌 和覆疏長
- P.12\_232(23) : ⑮[和]伽[羅]那 此云授記 亦曰解義 示果定時 故言授記 分別記  
緣 故
- P.12\_233(23) : 言解義 ⑯伽陀 此云偈經 亦曰詩經 文圓義盡 故偈偈也 巧<sup>[R]</sup>
- P.12\_234(23) : 意經 故曰詩詩志也 ⑰優陀那 此云無問自說 亦曰視經 亦曰
- P.12\_235(23) : 歎經 初經無<sub>[レ]</sub>視能問 故自說 略歎義<sup>[縮]</sup>○以爲初 ⑱尼陀那 此云
- P.12\_236(23) : 因緣經 亦曰應時經 說必有由時合即應 ⑲阿波陀那 此云譬
- P.12\_237(22) : 喻經 譬類也 喻曉也 以其解曉其未悟 ⑳伊帝<sup>[H]</sup>曰多伽 此云
- P.12\_238(23) : 本事經 曰<sub>[レ]</sub>亦如是語 本事是約法爲名述 昔所習語必如是
- P.13\_239(25) : ㉑闍陀伽 此云本生經 本生是約人爲名述 <sup>(73)</sup>昔所生曾爲其物然佛
- P.13\_240(25) : 無當生故 說生爲本 ㉒毗佛略 此云<sup>(74)</sup>方廣 正直之說爲方 理行  
{○}弘<sup>[?]</sup>
- P.13\_241(22) : 爲廣 ㉓<sup>(75)</sup>阿陀<sub>[レ]</sub>浮達摩 此云未曾有 曰<sup>[白][狗]</sup>○聽經 青牛行鉢 所說
- P.13\_242(23) : 奇持 故未曾有 ㉔優波提舍 此云論義 亦曰註解 論義從難者
- P.13\_243(14) : 爲名 註解從釋者爲稱 此義文可解



## 五、韓国の現存本

本稿の校正中に、韓国の社団法人法華弘通會の申皓均（圓鏡）法主より、「慧浄の『妙法蓮華経續述』は、その一部が韓国の国内に現存している。」という貴重な助言を頂戴した。

以下に、その概要を記すと、高麗の義天（CE.1055-1101）が、蒐集章疏の刊行を目的に、興王寺に設置した「教藏都監」より彫造された、いわゆる『高麗續藏經』の一部が、時を経て、一四六一（世祖七）年に、主に、ハングル<sup>(76)</sup>による仏經の翻訳刊行と、『高麗續藏經』の板刻、また、仏書編纂とをその目的として、朝鮮の世祖（CE.1417-1468）によって設けられた、「刊經都監」より重修（覆刻）されたものが、現存しているということである<sup>(77)</sup>。

至急、関連情報を調査してみると、十巻のうち、巻一・二が、すでに一九六三年一月二日に、韓国の宝物（第206号）に指定されており、さらには、巻五・六が、二〇〇四年に実施された松廣寺<sup>(78)</sup>の四天王像腹藏調査の際に、新たに発見され、二〇〇六年四月二八日に、同じく宝物（第1468号）に指定されていることが分かった。すなわち、現在までに、十巻のうち、四巻（巻一・二・五・六）について、韓国にその伝本の存在が確認できたのである。

巻一・二については、原本のイメージ（Kor.206 pp.1-178）とテキスト（翻刻）とが、国家記録遺産ホームページ<sup>(79)</sup>に公開されていたため、これを手にしてその内容を確認してみたところ、巻二までが、序品に該当することが分かり、次いでこれを『續述』そのものに同定すべく、『論述記』に引用されている慧浄の説<sup>(7)</sup>と対比した結果、『論述記』の引用文例が、本書の本文と完全に一致することが判明したのである。したがって、『論述記』の引く「浄（法）師云」とは、慧浄の『續述』からの引用であることが再確認でき、本書こそが、筆者を含めてこれまで散逸と看做してきた慧浄の『妙法蓮華経續述』そのものであることが明確になったのである。この結果を受け、本稿では、一先ず、



『論義』と本書との対応関係を註に補うことにした。

また、巻五・六は、原本が所蔵されている松廣寺聖宝博物館の館長古鏡上人が、発見当時に調査のために撮影した写真データ (Kor.1468 pp.1-170 [写真の整理番号: 040131 001-090]) を快く提供して下さったため、これをもとにその構成を確認してみたところ、巻五が譬喩品に、巻六が信解品～授記品に該当することが分かった。本書は、巻五の二五張以後がかなりのダメージを受けているが、『論義』は、巻五の凡そ三三張 (Kor.1468 p.66-33v, l.6) までが該当するため、一部は『論義』によって復元できるものと考えられる。

以下、現存本に関する書誌情報並びに主要記事を和訳し附しておく。

【巻一・二】

- 種目: 宝物 第206号、名称: 松廣寺妙法蓮華経續述 (巻一・二)、分類: 記録遺産/典籍類/木版本/刊経都監本、数量/面積: 一冊、指定 (登録) 日: 1963.01.21、所在地: 全南順天市松光面新坪里12松廣寺、時代: 高麗時代 (朝鮮世祖)、所有者 (所有団体)・管理者 (管理団体): 松廣寺、文化財形態: 線装、形態書誌: (上下单辺、全郭: 縦24.1cm×横113.2 (56.1?) cm、無界、全葉: 30行22字、サイズ: 縦37.5cm×横32.5cm)
- 唐の京師紀国寺の沙門釈慧浄「唐京師紀國寺沙門釋 慧浄 述」(Kor.206 p.6-1r, l.2) が、『妙法蓮華経』について續述した書。『新編諸宗教藏總録』巻一の法華経部には十巻とあるが、現在巻一と巻二との二巻のみが伝わるに過ぎない。巻一の巻末には「壽昌元年 (CE.1095) 乙亥歲高麗國大興王寺奉 宣雕造 秘書省楷書同正臣南宮 □ 書」(Kor.206 p.86-41r, l.13 - p.87-41v, ll.1-2) とあり、巻二の巻末には「壽昌元年乙亥歲大興王寺奉 宣彫造 寫經院書者臣柳 侯樹 書」(Kor.206 p.173-43v, ll.6-8) とある。これにより、巻一と巻二とは、同年に板刻されたが、筆書は、秘書省と、写経院とであり、それぞれ別人によるものであることが分かる。本書は、「天順五年 (CE.1461) 辛巳歲朝鮮國刊經都監奉 教重修」(Kor.207 no.3(6) p.84-41r,

11.8-9) の刊記を有する『金剛般若經疏開玄鈔』卷六(宝物 第207号)と、板刻の技量や紙質など印刷条件が同一であるため、「刊経都監」の重修本であることが分かる。本書は、元々二卷一冊であったが、一九八〇年の指定文化財補修の際に、二冊に分冊された。

- 翻訳原文及び詳細は、国家記録遺産ホームページ<sup>(79)</sup>及び韓国文化財庁ホームページ<sup>(80)</sup>を参照されたい。

### 【卷五・六】

- 種目：宝物 第1468号、名称：順天松廣寺塑造四天王像腹藏遺物一括(妙法蓮華經續述(卷五・六)・発掘調査番号II-5)、分類：遺物／仏経工芸／腹藏品、数量／面積：一括、指定(登録)日：2006.04.28、所在地：全南順天市松光面新坪里12松廣寺、時代：高麗時代(朝鮮世祖)、所有者(所有団体)・管理者(管理団体)：松廣寺、形態書誌：(四周单边、全郭：縦23.9cm×横(28.5+28.5)cm、無界、全葉：30行22字、無魚尾、サイズ：縦34.1×横31.2cm)、板尾題：法花續述、表紙の有無：表・裏存、保存状態：下、その他：卷五は、1-19、21-45張であり、表紙裏面に墨書で、「廿丈 本无」(Kor.1468 p.2, 1.1)とあり、2枚(20張の左右)の欠損が記されている。卷六は、1-36張である。
- 松廣寺の四天王像は、一六二八(仁祖六)年に重造され、一七二〇(肅宗四六)年に、第一次重修改彩を経て以来、六回の重修改彩が行われた。二〇〇三年に、南方の増長天の左臂が切断され、二〇〇四年に、復旧作業が実施された。復旧作業を実施する前に、四天王像の腹藏調査が先に行われた。松廣寺四天王像腹藏調査を通じて、発見された典籍は十二種十四冊であり、北方の多聞天より、『金剛鉀顯性録』卷三・四、『大威徳經陀羅尼』卷四、『妙法蓮華經續述』卷五・六、『法華經玄贊會古通今新抄』卷一・二、『法華文句記』卷五・六、『法華文句記』卷七・八、『成唯識論述記』卷六、『成唯識論了義燈抄』卷三・四、『圓覺經大疏釋義抄』卷十三、『仁王護國般若經疏法衡抄』

卷五・六の九種十冊が、西方の広目天より、『[科註] 妙法蓮華經』卷七の一種一冊が、南方の増長天より、『妙法蓮華經玄義』卷三・四、『成唯識論義景鈔』卷十九の二種二冊が、東方の持国天より、『成唯識論義景鈔』卷十二の一種一冊が、これである。この中で、『妙法蓮華經續述』卷五・六は、現在、松廣寺聖宝博物館に所蔵されている『妙法蓮華經續述』卷一・二(宝物 第206号)と一具であることが確認された。四天王像の腹蔵典籍は、発見当時から現在まで、関連学会の注目を集めており、二〇〇五年には、書誌学会にて、集中的に研究報告されている。とくに、義天の「教蔵都監」の刊行本は、現在までに国内外を含めてわずかに三種が知られたに過ぎず、その後の「刊経都監」からの重修本が十余種知られたのみであるが、松廣寺で新たに発見された腹蔵典籍は、そのほとんどが「教蔵都監」の刊行本を底本にした重修本であるため、「教蔵都監」の刊行の実態及び以下のような性格を推定することができる。①興王寺の「教蔵都監」の以前に、すでに金山寺の廣教院から刊行された版本が、実際に存在していたこと。②「教蔵都監」では、契丹から入手した木版本は、そのまま覆刻して刊行したこと。③写本で伝わっていたものを朝鮮の「刊経都監」では、正書本にして刊行したこと。このように、四天王像腹蔵典籍は、今まで学会にて、間歇的に論議されてきた問題を立証しうる新たな史料として、仏教文化史・書誌学・印刷文化史などの分野において貢献できるものと考えられる。

- ・翻訳原文及び詳細は、韓国文化財庁ホームページ<sup>(80)</sup>・(姜順愛 [2004] p.37)・(朴智善 [2005] p.64)・僧寶宗刹曹溪叢林松廣寺ホームページ<sup>(81)</sup>を参照されたい。

最後に、韓国国内に、慧浄述『妙法蓮華經續述』が現存すると、ご教示下さった韓国の社団法人法華弘通會の申皓均(圓鏡)法主と、原本の写真データ(卷五・六)を快く提供して下さいました松廣寺聖宝博物館の館長古鏡上人とに、深く御礼申し上げます。また、本稿の執筆にご指導頂いた恩師三友健容教授(立正

大学)、藤井教公教授(北海道大学)、高橋堯英教授(立正大学)、福士慈稔教授(身延山大学)にも感謝申し上げる次第である。

(二〇一〇年三月稿)

〈参考文献〉(題名の冒頭にアスタリスクを付したものは筆者による和訳)

- 中西久味稿 [2008] 「唐の紀国寺慧浄撰とされる『孟蘭盆経續述』『般若心経疏』について」(『人文科学研究／新潟大学 [人文学部]』122, pp.95-111)
- 三友健容稿 [2005] 「義寂撰『法華論述記』の一考察」(村中祐生先生古稀記念論文集刊行会編集 [2005] 『大乘佛教思想の研究 村中祐生先生古稀記念論文集』(山喜房佛書林、東京、pp.117-156))
- 朴 智善稿 [2005] 「\*松廣寺所蔵佛書の保存に関する研究」(『書誌学研究／韓國書誌學會』30, pp.61-72)
- 姜 順愛稿 [2004] 「\*順天松廣寺四天王像の腹蔵典籍考」(『書誌学研究／韓國書誌學會』27, pp.27-61)
- 朴 相國稿・泉 千春訳 [2001] 「義天の教蔵 刊行とその名称を中心に」(石上善應教授古稀記念論文集刊行会編 [2001] 『仏教文化の基調と展開 石上善應教授古稀記念論文集』第2巻 (山喜房佛書林、東京、pp.37-51))
- 高山寺典籍文書綜合調査團編 [1999] 『高山寺本東域傳燈目錄 (高山寺資料叢書 第19冊)』(東京大學出版會、東京)
- 菅野博史著 [1994] 『中国法華思想の研究』(春秋社、東京)
- 金岡照光編 編集協力 河村孝照, 柿市里子 [1990] 「敦煌文献目錄 スタイン・ペリオ蒐集 (漢文文献編)」(『東洋学研究』25, pp.1-305)
- 高山寺典籍文書綜合調査團編 [1988] 『高山寺古典籍纂集 (高山寺資料叢書 第17冊)』(東京大學出版會、東京)
- 黄 永武主編 [1981-1986] 『敦煌寶藏』第47冊 (新文豐出版、臺北、pp.422-434)
- 兜木正亨編 [1978] 『スタイン、ペリオ蒐集敦煌法華経目錄』(靈友会、東京)
- 水野弘元著 [1972] 『仏教要語の基礎知識』(春秋社、東京、pp.78-86)
- 宇井伯寿著 [1961] 『大乘莊嚴經論研究』(岩波書店、東京)
- 趙 明基稿 [1959] 「\*大覺國師の天台の思想と續蔵の業績」(白性郁博士頌壽記念事業委員会 [1959] 『佛教學論文集』(東國大學校、ソウル、pp.1-39))
- Lionel Giles [1957] *Descriptive catalogue of the Chinese manuscripts from Tunhuang in the British Museum*, Trustees of the British Museum, London.
- 塩田義遜著 [1943] 『法華経の研究』(日蓮宗傳道要具、東京)
- 矢吹慶輝編著 [1933] 『鳴沙餘韻解説 燉煌出土未傳古逸佛典開寶』(岩波書店、東京)

紀國寺慧浄の『法華經續述』考(1) (金)

金山正好稿 [1932] 「石山寺所藏の註法華經」(『佛教學研究室』1、pp.10-14)

〈略語〉

- T 『大正新脩大藏經』  
SZ 『新纂大日本續藏經』  
鳴沙 『鳴沙餘韻解説 燉煌出土未傳古逸佛典開寶』  
Giles 『\*大英博物館蔵の敦煌漢文文献に関する解説日録』  
兜木 『スタイン、ペリオ蒐集敦煌法華經日録』  
東洋25 「敦煌文献目録 スタイン・ペリオ蒐集(漢文文献編)」  
Kuz.135384 『法華經論述記』京都大学附属図書館蔵本(蔵/7/ホ/25)  
Kor.206 『松廣寺妙法蓮華經續述』卷一・二 松廣寺聖宝博物館蔵本(宝物 第206号)  
「r (recto)」綴じ本の右側の頁(表) ⇔ 「v (verso)」  
Kor.207 『松廣寺金剛般若經疏開玄鈔』卷四・五・六 松廣寺聖宝博物館蔵本(宝物 第207号)  
Kor.1468 『松廣寺妙法蓮華經續述』卷五・六 松廣寺聖宝博物館蔵本(宝物 第1468号)

〈キーワード〉 法華章疏、慧浄、法華經續述、法華經玄贊要集、法華問答

註

- (1) 一説にはその没年を(CE.653)とする。(中西久味 [2008] p.109 註(1)) 参照。  
(2) 道宣(CE.596-667)撰(CE.645-)『續高僧傳』卷第三の唐京師紀國寺沙門釋慧浄傳三に「又撰法華經續述十卷。勝鬘仁王般若温室孟蘭盆上下生各出要續。盛行於世。」(T.50 no.2060 p.443a, ll.13-15)とある。  
(3) 慧詳撰(CE.VIII)『弘贊法華傳』卷第三に「唐京師紀國寺釋慧浄(有疏十卷)」(T.51 no.2067 p.21b, l.27)と、義天録(CE.1090)『新編諸宗教藏總録』卷第一に「[法華經]贊述十卷 慧浄述」(T.55 no.2184 p.1168c, l.6・『高山寺古典籍纂集』p.264)と、平祚録(CE.914)『法相宗章疏』に「法華述贊十卷(慧浄述)」(T.55 no.2180 p.1138c, l.8)と、永超集(CE.1094)『東域傳燈目錄』に「同 [=法華] 經述贊十卷(惠浄) 同 [=法華] 經贊略二卷(或云略贊同上)」(T.55 no.2183 p.1149b, ll.13-14)と、藏俊撰(CE.1176)『注進法相宗章疏』に「同 [=妙法蓮華] 經述讚十卷 惠<sup>○</sup>浄」【T.55 p.1140 脚註④】「淨=沼<sup>Ⓞ</sup>」(T.55 no.2181 p.1140c, l.9)とあるも、書名は必ずしも一致しない。さらに詳しくは、(金山正好 [1932] p.13)を参照されたい。引用文中、[=……] 括弧内は、自らが補ったもの。



- (4) [S.2662] — 「法華要問答 (擬題) 大正藏經八五の一九九—二〇五 スタイン本 (S.2662)。首末破爛、失題殘卷にして、前後一百三番の問答 (前後の一は殘缺) より成る。就中、初四十五問答は『法華經』分品の順序を追ひ、餘の五十八問答は經文の前後に拘らず、専ら經文の法數要句を解釋せり。即ち初の四十五問答は序品三條、方便品十條、譬喩品二十二條、信解品一條 (標目には三條)、藥草喩品一條、授記品三條 (標目には二條)、化城喩品二條 (標目には一條)、壽量品一條、法師功德品一條の八品に分たれ、主として天親の法華論に據れり。次に『法華論』以外の引用書目及び人師の説に、『無量壽經』(一所)、『涅槃經』(四所)、『維摩經』(一所)、『法句經』(一所)、『楞伽經』(一所)、淨法師 (一所)、惠淨法師 (一所)、藏法師 (一所或は二所) 等あり。此の中、藏法師とは隋吉藏の『法華玄論』第八の取意なるべし、又淨法師或は惠淨法師は唐紀国寺慧浄の『法華經述讚』或は『同贊略』よりの引用なるべく、『法句經』は偽經『法句經』よりの引用とす。其の他、『舊翻阿頼耶識爲家識』と云ひ、又三車家の口吻を用ゆる等、本書は恐らく中唐以後の製作か。憾むらくは撰者の名を逸す。」(『鳴沙』 pp.102-103)、 「5613. \*—\*Good cursive MS. Thin soft paper. 18ft. S. 2662.」 (『Giles』 p.171)、 「法華經疏 (仮題) 行数373 一紙 {縦29.3cm 横37.2cm 行数25 界高26.0cm} 正藏本の底本、問答体の積文、正藏本に「法華問答」とする、一行二五字内外、有界、朱の印しを所々記入、細いすきめのある白紙、行書体、初唐。」 (『兜木』 p.185) ただし、『大正新脩大藏經』の第八五卷古逸部に所収されているテキストは、原本が草書体であるためか誤読が目立ち、引用のためには再確認が不可欠となる。
- (5) [S.6494] — 「5604. \*—\*p'in 1 (end only) —3. Mediocre MS. Whitish buff paper. 30 cm. × 27¼ft. S. 6494.」 (『Giles』 p.171)、 「法華經疏 (仮題) 行数495 一紙 {縦30.0cm 横48.5cm 行数28 界高25.5cm} 品一首次～品三までの積、一行二五～二八字内外、有界、首五行下欠、淡黄紙、唐代。」 (『兜木』 p.185)、 「妙法蓮華經 (㊟論義第一品～第三品 (擬)) \*方便品第二・\*譬喩品第三」 (『東洋25』 p.195)
- (6) ただし、『妙法蓮華經論義』の譬喩品 (『妙法蓮華經續述』卷第五) に「物謂如來成佛甫述何得。門徒道疊云。極若不遠申靈算無以法彼情疑故。」 (S.6494 p.15, ll. 292-293 • Kor.1468 p.6-2v, ll.13-15) とあるも、詳細は不明である。
- (7) 義寂 (CE.VII-VIII) 積義一撰『法華經論述記』における慧浄の三説とは以下のとおりである。(1) 「淨法師云。此法説人難値。經無量劫。或不聞故。曰希有。」 (SZ.46 no.790 p.791b, ll.11-12 • Kuz.135384 p.99, ll.788-789 • Kor.206 p.151-32v, l.13)、(2) 「淨師云。因成就者。由文殊見昔十事爲答。彌力之因。見之自在。故言成就也。」 (SZ.46 no.790 p.791b, l.24 - p.791c, l.2 • Kuz.135384 p.101, ll.802-803 •



Kor.206 p.152-33r, ll.6-7)、(3)「淨法師云。不斷大法鼓。云何顯入菩薩密境界大義。此記令緣覺入菩薩密境界。菩薩以悲爲體。無方救苦爲密。如來法音不絕。彼則進入悲境。此時破獨覺自愛障。入十迴位。故曰入菩薩密境界大義。」(SZ.46 no. 790 p.792a, ll.16-20・Kuz.135384 p.106, ll.841-845・Kor.206 p.155-34v, ll.11-14)。また、(三友健容 [2005] pp.140-141)には「淨法師というからには、最後が「淨」とつくもので、『法華經』の注釈をしているなかから該当者を探してみれば良いのであろうが、『東域傳燈目錄』に「同經述贊十卷(惠浄)」「同經贊略二卷(或云略贊同上)」(『東域傳燈目錄』(T55, 1149b)『高山寺本東域傳燈目錄』p.180(東京大学出版会))とある惠浄かと考えられる。『續高僧傳』には慧浄が『法華經續述十卷』を撰したとあるから、この『法華經述贊』十卷を指すものと思われる。このことから、惠浄とは貞観年中に活躍した唐の慧浄のことであるとしても、残念ながら『法華經述贊』は現存していないため、その教理を知ることには出来ない。」とある。これに加えて、智昇(CE.658-740)撰(CE.730)『開元釋教錄』卷第九には「法華論五卷(莫知造者單重未悉景雲二年譯) 集量論四卷(景雲二年譯已上多取奏行年月所以出日<sup>○</sup>名同) 右六十一部二百三十九卷(法華論下二部九卷失本)。沙門釋義浄。」【T.55 p.568 脚註④】「名=多<sup>⊖</sup>」(T.55 no. 2154 p.568b, ll.2-5)とあるから、義浄(CE.635-713)の景雲二年(CE.711)の新訳なる「法華論五卷」の可能性も視野に入れなければならない。

- (8) ただし、慧浄(CE.578-645)述『妙法蓮華經續述』卷第五(Kor.1468 p.52-26v, l. 14 - p.54-27v, l.2)に、道世撰(CE.668)『法苑珠林』とほぼ一致する文例が見られる。しかも、本箇所は、『法苑珠林』が典拠として挙げている僧伽提婆訳(CE.391)『三度論』よりも、『妙法蓮華經續述』に類似していることから、『法苑珠林』が先行する『妙法蓮華經續述』を参照した可能性が考えられるため、『妙法蓮華經論義』の成立問題に関しては、さらに吟味を重ねなければならない。
- (9) 『妙法蓮華經續述』卷第二に「此經論中自示現五劫。一夜二晝三月四時五年。案夜者。過夜至六十位名夜劫。晝月時年亦爾。外國俗算。有六十位。過此已後。不可數故。名阿僧祇。如是五劫。年劫最長數。一至六十位。名一阿僧祇劫。如是復過無量無邊阿僧祇年劫。時量不可得。故說時難值。」(Kor.206 p.159-36v, l.14 - p.160-37r, l.3)とある。引用文中、「此經論」とは、婆藪槃豆釈菩提留支訳(CE.528)『妙法蓮華經憂波提舍』卷上(T.26 no.1519 p.4a, ll.23-25)に対応する。また、「外國俗算有」より「故名阿僧祇」までは、その引用が『法苑珠林』卷第一(T.53 no.2122 p.274a, ll.14-15)に認められる。
- (10) 鳩摩羅什訳(CE.406)『妙法蓮華經』序品に「諸善男子。如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫。爾時有佛。號<sup>○</sup>日月燈明如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。演說正法。初善中善後善。其義深遠。其語巧妙。純一無雜。

具足清白梵行之相。】(T.9 p.3 脚註⑩)「日月燈明 Candrasūryapradīpa.」(T.9 no.262 p.3c, ll.17-22) とある。

- (11) 吉藏(CE.549-623)撰『法華義疏』卷第二に「名日月燈明者。<sup>一三七</sup>注經解云。聖人無名借義以立稱。仁者見謂之仁。智者見謂之智。上根因之以得明如日。中根因之以得明如月。下根因之以得明如燈。三根資之以得明故言日月燈明。」(T.34 no.1721 p.478c, ll.15-19) 「【一三七】劉虬の注法華經。」(『國譯一切經』經疏部三、p.97) とある。また、『妙法蓮華經續述』卷第二に「今先舉別號。顯生身異。注者云。聖人無名借義以立稱。仁者見之謂之仁。智者見之謂之智。上根因之以得道如日明。中根因之以得道如月明。下根因之以得道如燈明。故曰日月燈明佛。」(Kor.206 p.160-37r, ll.11-14) とある。引用文中、「注者云」とは、散逸した劉虬(CE.438-495)の『注法華經』からの引用であり、このほかに、卷第一に二箇所(Kor.206 p.54-25r, ll.11-12・p.80-38r, ll.10-11) 見出される。これらの引用文例は、『法華義疏』(T.34 no.1721 p.461a, ll.11-12・p.464b, ll.25-29) にも見出される。とくに、(塩田義遜 [1943] p.131) には「本書は早く散逸したが、山城の醍醐寺、或は近江の石山寺經藏に藏本あることを聞いたが未だ判然しないのである。その他に就ては「僧傳」中或は製疏のことは見ゆるがその内容に就ては勿論一切不明である。併し前掲の天台・嘉祥の疏にその内容を彷彿することが出来るものがある。」と現存本に関する言及がある。なお、吉藏の法華經疏に見られる劉虬の『注法華經』の逸文については(菅野博史 [1994] pp.117-140) に詳しい。
- (12) 龍樹菩薩造鳩摩羅什訳(CE.405)『大智度論』卷二十四に「復次有聲聞人及菩薩。修念佛三昧。非但念佛身。當念佛種種功德法身。應作是念佛一切種一切法能解故名一切智人。一切法如實善分別說故。名一切見人。一切法現前知故。名一切知見無礙人。等<sup>●</sup>心一切衆生故。名大慈悲人。有大慈悲故。名為世救。如實道來故。名為如來。應受一切世間供養故。名為應供人。成就不顛倒智慧故。名正遍知。戒定<sup>●</sup>慧智成就故。名明行。成不復還故。名善逝。知世間總相別相故。名世間解。善說出世間安隱道故。名無上調御師。以三種教法度衆生故。名天人師。一切世間煩惱睡能自覺亦能覺人故。名為覺人。一切所願具足故。名有德。十力成就故。名堅誓。得四無畏故。名人師子。得無量甚深智故。名大功德海。一切記說無礙故。名如風。一切好醜無憎愛故。名如地。燒一切結使薪故。<sup>●</sup>名如火。善斷一切煩惱習故。名具足解脫。最上<sup>●</sup>處住故。名為世尊。」【T.25 p.236 脚註②】「心=視<sup>㊦</sup>」【T.25 p.236 脚註③】「慧智=智慧<sup>㊧</sup>」【T.25 p.236 脚註④】「名=言<sup>㊨</sup>」【T.25 p.236 脚註⑤】「處住=住處<sup>㊩</sup>」(T.25 no.1509 p.236a, l.20 - p.236b, l.9) とある。また、『妙法蓮華經續述』卷第二に「次舉通號。顯法身同。智度論云。修念佛三昧。非但念佛生身。當念種種法身。應作是念如實道來。故名如來。應受供養故名應供。成就不顛倒智慧名正遍知。戒定慧成就故名明行足。不復還故名善

逝。知世間總相相故名世間解。善說出世安隱道。故名無上調御師。以三種法度人故名天人師。一切煩惱能覺故名佛。最上處住故名世尊。然無上土調御丈夫則彼合而此開。佛世尊則彼開而此合。故皆十數也。」(Kor.206 p.160-37r, 1.14 - p.161-37v, 1.6) とある。

- (13) 『妙法蓮華經續述』卷第二に「配句者。演說正法。初中後善者。是時善。初善者。聞時爲信因故。中善者。思時爲喜因故。後善者。修時爲覺因故。爲覺因者。定心觀察。此法道理得如實智故。」(Kor.206 p.161-37v, 1.10-13) とある。本箇所は、無著菩薩 (CE.IV) 造波羅頗蜜多羅記 (CE.630-632) 『大乘莊嚴經論』卷第六 (T.31 no.1604 p.620b, 1.5-8) に対応する。『大乘莊嚴經論』の漢訳年代については、(宇井伯寿 [1961] pp.4-6) に詳しい。
- (14) 『妙法蓮華經續述』卷第二に「其義深遠者。是義善。義善二種。一深二遠。說義與因緣法合故曰深。說義與無相法合故曰遠。故彼論曰。義正謂善義妙義。與世諦第一義諦相應故。」(Kor.206 p.161-37v, 1.13 - p.162-38r, 1.1) とある。引用文中、「彼論曰」とは、『大乘莊嚴經論』卷第六 (T.31 no.1604 p.620b, 1.9-10) に対応する。
- (15) 『妙法蓮華經續述』卷第二に「其語巧妙者。是語善。語善亦兩。一巧二妙。說易受曰巧。義易解曰妙。故彼論曰。語巧謂易受及易解。由文顯義現故。」(Kor.206 p.162-38r, 1.1-3) とある。引用文中、「彼論曰」とは、『大乘莊嚴經論』卷第六 (T.31 no.1604 p.620b, 1.10) に対応する。
- (16) 『妙法蓮華經續述』卷第二に「純一無雜者。是獨善。異外道有漏行。純一者佛法有故。無雜者外道無故。故彼論曰。不共他相應者。是獨義。由此行不共外道因行故。」(Kor.206 p.162-38r, 1.3-5) とある。引用文中、「彼論曰」とは、『大乘莊嚴經論』卷第六 (T.31 no.1604 p.620b, 1.15-16) に対応する。
- (17) 『妙法蓮華經續述』卷第二に「具足者。是滿善異內道有漏行。彼行不能具斷三界惑。不圓滿故。故彼論曰。具斷三界惑者。是滿義。由此行具斷三界煩惱故。清者是清善。謂有學身中無漏行自性淨故。故彼論曰。自性者是清義。由此行是無漏自性淨故。白者是白善。謂無學身中無漏行無垢淨故。故彼論曰。無垢者是白義。由此行在漏盡身。種類得無垢淨故。」(Kor.206 p.162-38r, 1.5-11) とある。引用文中、「彼論曰」とは、『大乘莊嚴經論』卷第六 (T.31 no.1604 p.620b, 1.16-19) に対応する。
- (18) 『妙法蓮華經續述』卷第二に「梵行之相者。梵是淨義。所謂涅槃。行是趣義。所謂道諦。後之四善是趣涅槃之道。是梵家之行體。故曰梵行之相。」(Kor.206 p.162-38r, 1.11-13) とある。
- (19) 『妙法蓮華經』序品に「<sup>レ</sup>姓<sup>●</sup>頗羅墮。」【T.9 p.3 脚註①】「Bhāradvāja。」(T.9 no.262 p.3c, 1.28-29) 「【七一】波羅陀 (Bharadvāja) 婆羅門一八姓の一、利根

と譯す。」(『國譯一切經』法華部全一、p.34) とある。また、『妙法蓮華經續述』卷第二に「經曰又同一姓姓頗羅墮者。此明姓同也。姓有六。一迦葉。此云飲光。二遏底。此云無三毒。三橋陳如。此云火器。四訶梨多。此云善取。五瞿曇。此云破闇。六頗羅墮。此云利根。此六是婆羅門家種。今皆同後姓也」(Kor.206 p.163-38v, ll.10-13) とある。

- (20) 『妙法蓮華經』序品に「時會聽者亦坐一處。六十小劫身心不動。聽佛所說謂如食頃。」(T.9 no.262 p.4a, ll.26-27) とある。
- (21) 『大智度論』卷五十に「復次有人言。聲聞法中無有不可思議事。不得一日一坐中說盡。佛有無礙解脫。菩薩有不可思議三昧。能令多時作少時。少時作多時。亦能以大色入小。小色作大。又如六十小劫說法華經人謂從日至食。」(T.25 no.1509 p.420b, ll.22-26) とある。また、『妙法蓮華經續述』卷第二に「問。實是六十小劫。云何謂如食頃。答。智論云。菩薩有不思議三昧。能令多時作少時。少時作多時。案不思議解脫力。能轉前人心令多時作少解。少時作多解。」(Kor.206 p.166-40r, ll.2-4) とある。
- (22) 栖復集 (CE.879) 『法華經玄贊要集』卷第十四に「五神力非神力對。謂佛神力轉易其心。令於長時謂如食頃。由此義故。可爲四句。一轉境不轉心。即變大地爲黃金。攬海水爲酪等。變定果色。有二解。一妙觀察智。擊發鏡智。令定果色種子。發起現行。二云。妙智自變。二轉心不轉境。如延七日爲劫。三心境俱轉。如芥子納於須彌。須彌入於芥子不增。須彌不減。又云。移諸天人。置於他土。移心移境。今此所說。即是第二轉心不轉境。四俱不轉。如凡夫心境是。今取苦樂對。然此時體不相應收。少時多時。隨心變。故是假也。」【SZ.34 p.509 脚註②】「子下一有芥子二字」(SZ.34 no.638 p.509a, ll.12-21) と類似する文例が見られる。また、『法華問答』には「(60) 問。長短無乖有無願返。云何六十小劫。謂如食頃理隔言違若爲分雪 答。六十之與食頃俱爲時收雖復長短不同草不識心變異。若心存分別則長有殊。若三界唯心則長短無二。是以須彌納芥子萬國俱舉毛端。斯乃心長則長亦非定有長短」【T.85 p.199 脚註②】「大英博物館藏燉煌本, S. 2662, 首題新加」(T.85 no.2752 p.202c, ll.4-10) とある。『法華問答』からの引用文中、冒頭に附した (A/B-C) の表記は、合計103問答中第A番目の、全体28品中第B番目の、第C番目問答という意味である。以下同様。また、『妙法蓮華經續述』卷第二に「然解脫力用大有三意。一轉色不轉心。二轉心不轉色。三轉色亦轉心。轉色者。如變大地爲金銀。變海水爲酥酪地水。實轉衆生心不轉。若取金銀酥酪得有受用。是名轉色。轉心者。如經說。或有衆生樂久住世而可度者。菩薩即申七日以爲一劫。令彼衆生謂之一劫。或有衆生不樂久住而可度者。菩薩即促一劫以爲七日。令彼衆生謂之七日。案此即轉心。若謂轉時者。約一人爲語亦可爾。依眷屬爲語事不得爾。何以故。若申七日實是一劫。即是延命一劫非謂七日。若謂一劫在七日內。



一人自言一劫。眷屬終是七日。若謂促一劫。以爲七日時。實七日則非促劫。至於眷屬猶見七日。若謂七日實是一劫。眷屬終亡以歷一劫。非促一劫以爲七日。以是義推。但是轉心非謂轉時譬如死於市者。苦日之促生地獄者。獸日之長。此但心有轉移。非開日有脩短。如中山淳酎流瀉。千日玄石但謂一寢。其事已歷三載。此則俗事轉心以長爲短。」(Kor.206 p.166-40r, l.4 - p.167-40v, l.4) とある。引用文中、「如經說」とは、鳩摩羅什訳 (CE.406) 『維摩詰所說經』卷中 (T.14 no.475 p.546c, ll.8-11) に対応する。

- (23) 『妙法蓮華經』安樂行品に「諸佛身金色 百福相莊嚴 聞法爲人說 常有是好夢 又夢作國王 捨宮殿眷屬 及上妙五欲 行詣於道場 在菩提樹下 而處師子座 求道過七日 得諸佛之智 成無上道已 起而轉法輪 爲四衆說法 經千萬億劫 說無漏妙法 度無量衆生 後當入涅槃 如烟盡燈滅 若後惡世中 說是第一法 是人得大利 如上諸功德」(T.9 no.262 p.39c, ll.6-17) とある。また、『妙法蓮華經續述』卷第二に「安樂行品。明聞法爲人說常有好夢。夢見作佛千萬億劫。爲衆說法。此卽一夢轉心以短爲長。況聖人神力能令七日作一劫解。能令一劫作七日解。華嚴經說。於一念中示現三世。入巧方便起諸刹海。於三世國示現成佛。案此於一念內轉衆生心爲三世解。是名轉心。」(Kor.206 p.167-40v, ll.4-9) とある。引用文中、「華嚴經說」とは、佛駄跋陀羅訳 (CE.418-420) 『大方廣佛華嚴經』卷第三 (T.9 no.278 p.410a, ll.18-20) に対応する。
- (24) 『妙法蓮華經續述』卷第二に「轉色心者。如經說。若菩薩住是解脫者。以須彌高廣內芥子中無所增減。須彌山王本相如故。而四天王忉利諸天不覺不知己之所入。唯應度者乃見。案須彌入芥子是轉色。見無增減是轉心。轉色謂轉大色爲小色。轉心謂轉衆生心作須彌解。」(Kor.206 p.167-40v, ll.9-13) とある。引用文中、「如經說」とは、『維摩詰所說經』卷中 (T.14 no.475 p.546b, ll.24-29) に対応する。
- (25) 不明。『妙法蓮華經續述』卷第二に「智度論明。脩羅與帝釋戰敗。遁入藕絲孔中。外道梵志非有智慧。藥草呪術能轉人心。案脩羅能變大色爲小色。梵志能轉善心爲惡心。況菩薩神力轉於色心。而爲難矣。」(Kor.206 p.168-41r, ll.3-6) とある。また、慧然集『鎮州臨濟慧照禪師語錄』に「祇如阿修羅與天帝釋戰。戰敗領八萬四千眷屬。入藕絲孔中藏。莫是聖否。」(T.47 no.1985 p.500a, ll.4-6) と類似する文例が見られる。
- (26) 『妙法蓮華經續述』卷第二に「然此三轉。復各三義。或轉自不轉他。或轉他不轉自。或自他俱轉。隨益不定。今言六十小劫。謂如食頃者。是轉心不轉色。於轉心中是自他俱轉。佛轉自心作六十劫解。欲多時說法華故。轉可化衆生心。令作食頃解。不違衆生壽限故。如此等事並不可思議。」(Kor.206 p.168-41r, ll.6-11) とある。
- (27) 『妙法蓮華經』序品に「時有菩薩。名曰<sup>●</sup>德藏。日月燈明佛。卽授其記。告諸比丘。

是德藏菩薩。次當作佛。號曰<sup>●</sup>淨身多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀。」【T.9 p.4 脚註⑥】「德藏 Śrīgarbha.」【T.9 p.4 脚註⑦】「淨身 Vimalanetra.」(T.9 no.262 p.4b, ll.2-5) とある。

- (28) 基 (CE.632-682) 撰『妙法蓮華經玄贊』卷第一末に「淨法師云初一品名序分。次十九品名正宗。神力品下有八品名流通。雖有此判不釋其所由也。」(T.34 no.1723 p.661b, ll.8-10) とあるように、方便品以下十九品を一区切りとするのは慧淨の科段である。また、『法華經玄贊要集』卷第六には「言淨法師者。紀國慧淨法師也。言十九品正宗者。紀國意。七喻三平等。爲正宗故。其十無上。既云餘殘修多羅。至普賢品來。亦有無上之義。故不取也。謾言。此說亦疎分別品也。下並無七三之義。何以正宗。攝十九品內。亦有無上。應非正宗。故知不可也。」(SZ.34 no.638 p.308b, l.23 - p.308c, l.4) と、『法華經玄贊釋』には「第三解者。從方便品。至常不輕品來。名正宗。神力下爲流通。如疏可知。淨法師以十九品爲正宗者。爲論釋七喻三車等。至壽量品。即無三車等。至常不輕品方盡。後無故。爲正宗可知。」【SZ.34 p.940 脚註①】「此書久埋敦煌沙中迨清朝末發掘之恨失冠頭今姑安首題待後來是正玄贊卷一中第二明經宗旨」(SZ.34 no.639 p.940b, ll.19-22) と慧淨の科段が詳述されている。

- (29) 『法華問答』に「(5/2-1) 問。方便品五分破二明一。云何五分云何破二明一 答。五分者。一歎妙法功德分。二歎法師功德分。三疑請分。四授記分。五斷疑分。破二明一者。破二乘執明一乘道。何者歎妙法分標所明一。歎師分示能明之人。疑請分即所破之二機。授記分是能破之一道。斷疑分更總定時處。通明機五分略同一乘義現故。曰五分破二明一」(T.85 no.2752 p.199b, ll.3-10) と、『法華經論述記』に「歎法分標所明之一。歎師分示能說之人。疑請分即顯所破之三乘。授記分現能破之一道。斷疑分更總定時處通明授受。」(SZ.46 no.790 p.793c, ll.8-10・Kuz.135384 p.118, ll.941-943) とほぼ一致する文例が見られる。翻刻本文中、括弧英数字の記号は、この五分釈 (Five-explanations) の分科を表す。以下同様。

- (30) 『妙法蓮華經』方便品に「爾時世尊從三昧安<sup>●</sup>詳而起。告舍利弗。諸佛智慧甚深無量。其智慧門難解難入。一切聲聞辟支佛所不能知。所以者何。佛曾親近百千萬億無數諸佛。盡行諸佛無量道法。勇猛精進名稱普聞。成就甚深未曾有法。隨宜所說意趣難解。舍利弗。吾從成佛已來。種種因緣。種種譬喻。廣演言教。無數方便引導衆生。令離諸著。所以者何。如來方便知見波羅蜜。皆<sup>●</sup>已具足。舍利弗。如來知見廣大深遠。無量無礙力無所畏。禪定解脫三昧。深入無際。成就一切未曾有法。舍利弗。如來能種種分別巧<sup>●</sup>說諸法。言辭柔軟悅可衆心。舍利弗。取要言之。無量無邊未曾有法。佛悉成就。止舍利弗。不須復說。所以者何。佛所成就第一希有難解之法。唯佛與佛乃能究盡諸法實相。所謂諸法如是相。如是性。如是體。如是力。如是作。如是因。如是緣。如是果。如<sup>●</sup>是報。如是本末究竟等。」【T.9 p.5 脚



- 註⑦「詳=祥<sup>㊦</sup>」【T.9 p.5 脚註⑧】「已=以<sup>㊦</sup>」【T.9 p.5 脚註⑨】「說諸=諸說<sup>㊦</sup>」【T.9 p.5 脚註⑩】「[是] -<sup>㊦</sup>」(T.9 no.262 p.5b, l.25 - p.5c, l.13) とある。
- (31) 慧浄述『阿彌陀經義述』に「舍利弗此云身子。鈍若有邊則<sup>㊦</sup>段陀利若有邊則<sup>㊦</sup>身子。告往知來。雄才<sup>㊦</sup>集<sup>㊦</sup>爽。神<sup>㊦</sup>慧<sup>㊦</sup>悟。」【T.37 p.308 脚註⑨】「段=繫<sup>㊦</sup>」【T.37 p.308 脚註⑩】「爽=爽<sup>㊦</sup>」【T.37 p.308 脚註⑪】「慧+(類)<sup>㊦</sup>」(T.37 no.1756 p.308b, ll.17-19) とほぼ一致する文例が見られる。また、『續高僧傳』卷第三の唐京師紀國寺沙門釋慧浄傳三に「浄啟令曰。昔有二人。一名蛇奴。道帚忘掃。一名身子。一聞千解。然則蛇奴再聞不悟。身子一唱便領。此非授道不明。但是納法非俊。」(T.50 no.2060 p.444a, ll.22-25) と類似する文例が見られる。同文例は、道宣撰 (CE.664) 『集古今佛道論衡』卷丙の皇太子集三教學者詳論事第五にも「浄啟令曰。昔有二人。一名蛇奴。道帚忘掃。一名身子。一聞千解。然則蛇奴再聞不悟。身子一唱千領。此非授道不明但是納法非<sup>㊦</sup>俊。」【T.52 p.383 脚註⑫】「俊=礙<sup>㊦</sup>」(T.52 no.2104 p.383b, ll.12-15) とある。
- (32) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷上に「諸佛智慧甚深無量者。爲諸大衆生尊重心。畢竟欲聞如來說法。言甚深者。顯示二種甚深之義應如是知。何等爲二。一者證甚深。謂諸佛智慧甚深無量故。二者阿含甚深。謂智慧門甚深無量故。言甚深者此是總相。餘別相。證甚深者五種示現。一者義甚深。謂依何等義甚深故。二者實體甚深。三者內證甚深。四者依止甚深。五者無上甚深。何者甚深。謂大菩提。大菩提者。如來所證阿耨多羅三藐三菩提故。云何甚深。一切聲聞辟支佛等所不能知故名甚深。言智慧者。謂一切種一切智義故。如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入一切聲聞辟支佛等所不能知故。」(T.26 no.1519 p.5a, ll.10-23) とある。
- (33) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷上に「阿<sup>㊦</sup>含甚深者八種示現。一者受持讀誦甚深。如經已曾親近供養無量百千萬億無數諸佛故。二者修行甚深。如經於百千萬億那由他佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故。三者果行甚深。如經舍利弗如來已於無量百千億那由他劫勇猛精進所作成就故。四者增長功德心甚深。如經名稱普聞故。五者快妙事心甚深。如經舍利弗如來畢竟成就希有之法故。六者無上甚深。如經舍利弗難解之法如來能知故。七者入甚深。入甚深者。名字章句意難得故。自以住持不同外道說因緣法名爲甚深。如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜說法意趣難解故。八者不共聲聞辟支佛所作住持甚深。如經一切聲聞辟支佛等所不能知故。」【T.26 p.5 脚註⑬】「含=舍<sup>㊦</sup>」(T.26 no.1519 p.5a, l.23 - p.5b, l.9) とある。『論義』では、阿含甚深の八種示現中、六・八を欠く。翻刻本文中、丸囲い英数字の記号は、『法華論』との対応関係を表す。以下同様。
- (34) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷下に「如是已說妙法功德具足。次說如來法師功德成就應知。如經何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故。如來成就四種功德故能度衆生。何等爲四。一者住成就。如經舍利弗如來成就種種方便故。種種方便者。謂從兜率

天中退沒乃至示現入涅槃故。二者教化成就。如經種種知見故。種種知見者。示現染淨諸因故。三者功德畢竟成就。如經種種念觀故。種種念觀者。以說彼法成就因緣。如法相應故。四者說成就。如經種種言辭故。種種言辭者。以四無礙智依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受而爲說故。」(T.26 no.1519 p.5b, ll.18-29) とある。また、『法華問答』には「(8/2-4) 問。論說法師功德有四種。何者是四。答。一往成就。謂起衆生機。二教化成就。謂六通身是。三功德畢竟成就。謂智定圓滿。四說成就。謂四辯說法。是名法師四種功德」(T.85 no.2752 p.199b, ll.17-21) とある。

- (35) 『法華經玄贊要集』卷第十六に「名往成就。紀國云。往者赴也。遍三業。吾從成佛來。此身業化。卽神通化。衆生根熟。感而遂通。心水稍淨清。佛日斯應。所以上退一生。下流八相。爲三病之良醫。作四生之慈父。語往者。廣演言教。是前雖現身丈六。但可觀相生折。若不教弘九部。無以憑論取悟。所以暢四辯於舌端。流八音於聽表。開三乘正路。塞六師邪徹。使聞之者。識是知。非行之者。從善而棄惡。意往者無數方便。前雖身語未能說經。意業蜜加。方能演暢。欲使來生。功德念念而增。生善根。新新不退。故說三業。名往成就。」(SZ.34 no.638 p.543a, l.19 - p.543b, l.4) とほぼ一致する文例が見られる。
- (36) 惠淨撰『溫室經疏』に「佛說溫室洗浴衆僧經者。夫以炬暗生死之中。獨秀昏眠之外。既朗明法。爰悟四生。覺行圓滿。故稱爲佛。暢四辯於舌端。流八音聽□□□七階之勝福。」【T.85 p.536 脚註④】「◎大英博物館藏燉煌本, S. 2497, 首題新加」(T.85 no.2780 p.536c, ll.21-24) とほぼ一致する文例が見られ、同文例はほかに、『◎法句經疏』に「天竺梵音號曰佛陀。此出譯言名爲覺者。無明如來獨秀重幽。孤明臣夜照達有無。解窮眞俗。覺行圓滿。導悟群生。故稱爲佛。暢四辯於舌端。敷八音於聽表。談法性則名義俱空。」【T.85 p.1435 脚註⑥】「◎佛蘭西國民圖書館藏燉煌本, P. 2325」(T.85 no.2902 p.1435c, ll.18-22) と、法聰撰『釋觀無量壽佛經記』に「說者口輪宣唱揚四辯於舌端流八音於聽表故云名」(SZ.22 no.405 p.246b, ll.3-4) とある。
- (37) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷下に「第四成就復有七種。一者種種成就。如經舍利弗諸佛如來深入無際。成就一切未曾有法故。二者言語成就。謂得五種美妙音聲言語說法。如經如來能種種分別巧說諸法言辭柔軟悅可衆心故。三者相成就。如經止舍利弗不須復說故。有法器衆生心已滿足故。四者堪成就。所有一切可化衆生。皆知如來成就希有勝功德●能說法故。如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故。五者無量種成就說不可盡。如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故。言實相者。謂如來藏法身之體不變義故。六者覺體成就。如來所說一切諸法唯佛如來自證得故。如經舍利弗唯佛如來知一切法故。七者隨順衆生意。爲說修行法成就。彼法何等如是等故。如經舍利弗唯佛如來能說一切法故。」【T.26 p.6 脚註①】「[能

説法] -㊦㊧) (T.26 no.1519 p.6a, 11.1-17) とある。『法華論』では七種を挙げ  
るが、『論義』では六章とし、一、種種成就を法門成就に改め、六、覺體成就を  
欠く。

- (38) 迦旃延子造五百羅漢積浮陀跋摩訳 (CE.437) 『阿毘曇毘婆沙論』卷第三十七に  
「復次於甚深十二因緣河。能盡其底者。是名為佛。聲聞辟支佛不爾。如三獸<sup>㊦</sup>度河。  
謂兔馬象兔。騰躑乃<sup>㊦</sup>度馬或盡其底。或不盡底而<sup>㊦</sup>度。香象於一切時。足蹈其底而  
<sup>㊦</sup>度。如兔<sup>㊦</sup>度河。聲聞<sup>㊦</sup>度因緣河亦復如是。如馬<sup>㊦</sup>度河。辟支佛<sup>㊦</sup>度因緣河。亦復  
如是。如香象<sup>㊦</sup>度河。佛<sup>㊦</sup>度因緣河亦復如是。」【T.28 p.277 脚註㉔】「度=渡<sup>㊦㊧</sup>」  
(T.28 no.1546 p.277a, 11.15-21) と類似する文例が見られる。同箇所が五百大阿  
羅漢等造玄奘訳 (CE.656) 『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第一百四十三には「有説。  
若有於甚深緣起河能盡源底。説名為佛。二乘不爾。故經喻以三獸渡河。謂兔馬象。  
兔於水上但浮而渡馬或履地或浮而渡。香象恒時蹈底而渡。聲聞獨覺及與如來。渡  
緣起河如次亦爾。」(T.27 no.1545 p.735b, 11.16-21) とある。
- (39) 『法華問答』に「(9/2-5) 問。止止不須説者如智慧周萬物慈洽。四生何不當機即  
説而使唱土以要諸者何 答。洪鐘雖響。必待擊而方鳴。大聖雖慈。亦待請而方説。  
若請而説。或致自讚之機有情方便令生企道之教」(T.85 no.2752 p.199b, 11.21-25)  
とほぼ一致する文例が見られる。これは『問答』の方便品十條の中、第五番目に  
当たる問答であるが、『問答』と『論義』との先後関係を論ずる上で、文頭に附  
く「五」に注目すれば、『問答』が『論義』より先行することになる。
- (40) 翻刻本文中、丸囲い漢数字の記号は、問答形式の記述を表す。以下同様。
- (41) 吉藏撰『法華玄論』卷第六に「問。得羅漢意即自知一乘。爲得説法華方乃知耶。  
又方便品以簡眞僞章二文相違。初云若實得羅漢不信此法無有是處。若不信此增上  
慢人。非阿羅漢。此明羅漢必信一乘。次文云除佛滅後現前無佛。明佛滅後羅漢亦  
有不信一乘。是以二文互相銜。云何會通。」(T.34 no.1720 p.405c, 11.5-11) と類  
似する文例が見られる。
- (42) 智雲 (CE.VIII) 撰『妙經文句私志記』卷第三に「此義等者結歎理深勸物精意此  
結經之義既爾固是難明若非精加意慮則無能會故須加意詳審若得向明破會前諸教意  
則殊途而同歸百慮而一致不加詳審而意無不斯盡矣此二通勸不開別也。」(SZ.29  
no.596 p.193a, 11.14-18) と類似する文例が見られる。
- (43) 『維摩經疏卷第三』に「問。勝鬘經云。凡夫如生盲不見衆色。聲聞如七日嬰兒不  
見日輪。如何今説聲聞過生盲也。答。若見諦理凡夫不能故。彼經説猶如盲人聲聞  
分得故。説如七日嬰兒不見日輪。今説聲聞不識根性故過生盲。非見諦理也。」【T.  
85 p.375 脚註㉔】「㊦佛蘭西國民圖書館藏燉煌本, P.2049」(T.85 no.2772 p.388c,  
11.7-12) と類似する文例が見られる。
- (44) 『法華經玄贊要集』卷第一に「即同歎法師妙中。三番五段。證理不圓。功德不滿。

説即不深也。即是第二了義。一切聲聞辟支佛。所不能知。唯佛知故。由此名玄。二者疏主自謙。故智論云。凡夫觀佛性。由如生盲人。二乘觀佛性。如嬰兒見月。地前菩薩如病眼人。初地至七地如電光。入觀即見。出觀即無。八九如隔羅縠中見月。十地菩薩唯自見性。不見他佛性。即是黑暗義。」(SZ.34 no.638 p.177b, Ⅱ.2-9)と類似する文例が見られる。

- (45) 『妙法蓮華經』方便品に「爾時大衆中。有諸聲聞漏盡阿羅漢阿若憍陳如等千二百人。及發聲聞辟支佛心比丘比丘尼優婆塞優婆夷。各作是念。今者世尊。何故慙歎稱歎方便而作是言。佛所得法甚深難解。有所言說意趣難知。一切聲聞辟支佛所不能及。佛説一解脫義。我等亦得此法到於涅槃。而今不知是義所趣」(T.9 no.262 p.6a, l.28 - p.6b, l.6) とある。
- (46) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷下に「自此已下次依示現三種義説。一者決定義。二者疑義。三者依何事疑義應當善知。決定義者。有聲聞方便得證深法作決定心。●於聲聞道中得方便涅槃證故。如是二種證法。示現有爲無爲法故。如經爾時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢次第乃至亦得此法到於涅槃故。言疑義者。謂諸聲聞辟支佛等不能得知。是故生疑。如經而今不知是義所趣故。依何事疑義者。聞如來說聲聞解脫與我解脫不異不別是故生疑。謂生疑者生因中疑。此事云何此事云何。此以如來數數爲説甚深境界。前説甚深後説甚深不同聲聞。以如是故生疑。如經爾時舍利弗知四衆心疑次第乃至而説偈言。」【T.26 p.6 脚註②】「於＝相◎」(T.26 no.1519 p.6b, l.19 - p.6c, l.4) とある。
- (47) 『妙法蓮華經』方便品に「爾時舍利弗知四衆心疑。自亦未了。而白佛言。世尊。何因何緣。慙歎稱歎諸佛第一方便。甚深微妙難解之法。我自昔來未曾從佛聞如是説。今者四衆咸皆有疑。●唯願世尊。敷演斯事。世尊何故慙歎稱歎甚深微妙難解之法。爾時舍利弗欲重宣此義。而説偈言」【T.9 p.6 脚註④】「唯＝惟◎」(T.9 no.262 p.6b, Ⅱ.7-13) とある。「三止三請の第一請」
- (48) 『妙法蓮華經』方便品に「爾時佛告舍利弗。止止不須復説。若説是事。一切世間諸天及人皆當驚疑。舍利弗重白佛言。世尊。●唯願説之。●唯願説之。所以者何。是會無數百千萬億阿僧祇衆生。曾見諸佛。諸根猛利智慧明了。聞佛所説則能敬信。」【T.9 p.6 脚註④】「唯＝惟◎」(T.9 no.262 p.6c, Ⅱ.7-12) とある。「三止三請の第二止・第二請」
- (49) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷下に「自此●以下次依示現四種事説。一者決定心。二者因授記。三者取授記。四者與授記應當善知。云何決定心。已生驚怖者令斷驚怖。以爲利益二種人故。是故如來有決定心。此驚怖者五種應知。一者損驚怖。謂小乘衆生如所聞聲取以爲實。謗無大乘起如是心。如來說言阿羅漢果究竟涅槃。我畢竟取如是涅槃。是故羅漢不入涅槃如是驚怖。二者多事驚怖。謂大乘衆生聞菩薩道劫數長遠種種苦行起如是心。佛道長遠。我於無量無邊劫中行菩薩行久受勤苦。如是



念故生驚怖心。以是故起取異乘心如驚怖。三者顛倒驚怖。謂心分別有我我所種種身。<sup>●</sup>見諸不善法如是驚怖。四者心悔驚怖。謂大德舍利弗等起如是心言。我不應修證如是小乘之法。如是悔已心即自止。即此心悔名為驚怖。此義應知。五者誑驚怖。謂增上慢聲聞之人起如是心。云何如來誑於我等如是驚怖。」【T.26 p.6 脚註③】「以下=已(宋)(元)(唐)【T.26 p.6 脚註④】「見=現(三)(唐) (T.26 no.1519 p.6c, ll.5-25) とある。

- (50) 『法華問答』に「(41/6-3) 問。菩薩發心理應進發。有何障礙退作聲聞。假顯退由示其性弱 答。此至本發大心希大果中間須行八萬四千波羅蜜行。後經三大阿僧祇時。雖言鼓玄掉於法流法長波而自息。由是菩薩退作聲聞。故上文言佛道長遠久受勤者乃可得成。我等疲極。今言退還即自證也。」(T.85 no.2752 p.201a, ll.13-19) とほぼ一致する文例が見られる。
- (51) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷下に「因授記者。如經止止舍利弗不須復說。若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故。此因授記皆生驚怖者有三種義。一者欲令彼諸大眾推求甚深妙境界故。二者欲令彼諸大眾生尊重心。畢竟欲聞如來說法。三者欲令諸增上慢聲聞之人捨離法座而起去故。第二請者。示現過去無量諸佛教化衆生。如經是會無數次第乃至聞佛所說則生敬信故。第三請者。示現今佛教化衆生。如經今此會中如我等比次第乃至長夜安隱多所饒益故。」(T.26 no.1519 p.6c, l.26 - p.7a, l.7) とある。
- (52) 『妙法蓮華經』方便品に「佛復止舍利弗。若說是事。一切世間天人阿修羅。皆當驚疑。增上慢比丘將墜於大坑。」(T.9 no.262 p.6c, ll.16-17) とある。「三止三請の第三止」
- (53) 『妙法蓮華經』方便品に「爾時舍利弗重白佛言。世尊。<sup>●</sup>唯願說之。<sup>●</sup>唯願說之。今此會中。如我等比百千萬億。世世已曾從佛受化。如此人等必能敬信。長夜安隱多所饒益。」【T.9 p.6 脚註④】「唯=惟(三)\* (T.9 no.262 p.6c, ll.21-24) とある。「三止三請の第三請」
- (54) 『法華經玄贊要集』卷第十八には「經云唯願說之唯願說之者。紀國云。重言者。表自他二利也。」(SZ.34 no.638 p.580b, ll.9-10) とある。
- (55) 『妙法蓮華經』方便品に「爾時世尊告舍利弗。汝已慍懃三請。豈得不說。汝今諦聽。善思念之。吾當為汝分別解說。說此語時。會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等。即從座起禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重及增上慢。未得謂得。未證謂證。有如此失。是以不住。世尊<sup>●</sup>默然而不制止 爾時佛告舍利弗。我今此衆無復枝葉。純有<sup>●</sup>貞實。舍利弗。如是增上慢人。退亦佳矣。汝<sup>●</sup>今善聽。當為汝說。舍利弗言。唯然世尊。願樂欲聞。」【T.9 p.7 脚註①】「默=嘿(三)【T.9 p.7 脚註②】「貞=眞(明)\* 【T.9 p.7 脚註③】「今=令(三) (T.9 no.262 p.7a, ll.5-15) とある。



- (56) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷下に「取授記者。以舍利弗等欲得授記。如經佛告舍利弗汝已三請豈得不說汝今諦聽如是等故。」(T.26 no.1519 p.7a, ll.7-9) とある。
- (57) 『妙法蓮華經』方便品に「佛告舍利弗。如是妙法。諸佛如來時乃說之。如<sup>○</sup>優曇鉢華時一現耳。舍利弗。汝等當信佛之所說言不虛妄。舍利弗。諸佛隨宜說法意趣難解。所以者何。我以無數方便種種因緣譬喻<sup>○</sup>言辭演說諸法。是法非思量分別之所能解。唯有諸佛乃能知之。所以者何。諸佛世尊。唯以一大事因緣故出現於世。舍利弗。云何名諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世。諸佛世尊。欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世。欲示衆生佛<sup>○</sup>之知見故出現於世。欲令衆生悟佛知見故。出現於世。欲令衆生入佛知見道故出現於世。舍利弗。是爲諸佛以一大事因緣故出現於世」【T.9 p.7 脚註④】「Udumbara.」【T.9 p.7 脚註⑤】「言辭＝言詞⑩下同」【T.9 p.7 脚註⑥】「[之] -<sup>○</sup>」(T.9 no.262 p.7a, ll.15-28) とある。
- (58) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷下に「與授記者六種應知。一者未聞令聞。二者說。三者依何等義。四者令住。五者依法。六者遮。未聞<sup>○</sup>者令聞。如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇鉢華如是等故。說者。如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言辭演說諸法如是等故。種種因緣者。所謂三乘。彼三乘者唯有名字章句言說非有實義。以彼實義不可說故。依何等義者。如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故。一大事者。依四種義應當善知。何等爲四。一者無上義。唯除如來一切智。知更無餘事。如經欲開佛知見令衆生知得清淨故出現於世故。佛知見者。如來能證以如實知彼深義故。二者同義謂諸聲聞辟支佛法身平等。如經欲示衆生佛知見故出現於世故。法身平等者。佛性法身無差別故。三者不知義。謂諸聲聞辟支佛等不能知彼真實處故。此言不知真實處者。不知究竟唯一佛乘故。如經欲令衆生悟佛知見故出現於世故。四者令證不退轉地。示現欲與無量智業故。如經欲令衆生入佛知見故出現於世故。又復示者。爲諸菩薩有疑心者。令知如實修行故。又悟入者。未發心者令發心故已發心者令入法故。又復悟者。令外道衆生覺悟故。又復入者。令得聲聞小乘果者入菩提故。令住者。如經舍利弗但以一佛乘故爲衆生說法故。依法者。如經舍利弗過去諸佛以無量無數方便種種譬喻因緣緣觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等故。言譬喻者如依牛故。得有乳酪生酥熱酥<sup>○</sup>及以醍醐。此五味中醍醐第一。小乘不如其猶如乳。大乘爲最猶如醍醐。此喻所明大乘無上。諸聲聞等亦同大乘無上義故。聲聞同者。此中示現諸佛如來法身之性同。諸凡夫聲聞之人辟支佛等。法身平等無差別故。此義皆是譬喻示現因緣之義如前所說。言念觀者。小乘諦中人無我等。大乘諦中眞如實際法界法性。及人無我法無我等種種觀故。言方便者。於小乘中觀陰界入。厭苦離苦得解脫故。於大乘中諸波羅蜜。以四攝法攝取自身他身。利益對治法故。遮者如經舍利弗十方世界中尚無二乘何況有三如是等故。無二乘者。謂無二乘所得涅槃。唯有如來證大菩提。究竟滿足一切智慧名大涅槃。非諸聲聞辟支佛等有涅槃法。唯一佛乘故。一佛乘者。依四種義說應當

善知。如來依此六種授記。是故前說何等法云何法何似法何相法何體法如是示現。何等法者。謂未曾聞故。云何法者。謂種種言辭譬喻顯說故。何似法者。所謂唯為一大事故。何相法者。為隨眾生器說諸佛法故。何體法者。所謂唯一乘體故。一乘體者。所謂諸佛如來平等法身。彼諸聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體。以因果行觀不同故。」【T.26 p.7 脚註①】「者令聞 = 令聞者㊦」【T.26 p.7 脚註②】「及 = 乃㊦」(T.26 no.1519 p.7a, l.10 - p.7c, l.9) とある。

- (59) 『妙法蓮華經』方便品に「舍利弗。如來但以一佛乘故為眾生說法。無有餘乘若二若三。舍利弗。一切十方諸佛法亦如是。」(T.9 no.262 p.7b, ll.2-4) とある。
- (60) 『妙法蓮華經』方便品に「舍利弗。十方世界中尚無二乘。何況有三。」(T.9 no.262 p.7b, ll.22-23) とある。
- (61) 『妙法蓮華經』方便品に「舍利弗。諸佛出於五濁惡世。所謂劫濁煩惱濁眾生濁見濁命濁。如是舍利弗。劫濁亂時眾生垢重。慳貪嫉妬成就諸不善根故。諸佛以方便力。於一佛乘分別說三。舍利弗。若我弟子。自謂阿羅漢辟支佛者。不聞不知諸佛如來但教化菩薩事。此非佛弟子。非阿羅漢。非辟支佛。」【T.9 p.7 脚註③】「妬 = 妬博㊦」(T.9 no.262 p.7b, ll.23-29) とある。
- (62) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷下に「自此<sup>●</sup>以下如來說法。為斷四種疑心應知。何等四疑。一疑何時說。二疑云何知是增上慢人。三疑云何堪說。四疑云何如來不成妄語。何時說者。諸佛如來於何時起種種方便說法為斷此疑。如經舍利弗諸佛出於五濁惡世所謂劫濁如是等故。云何知是增上慢人者。如來不為增上慢人而說諸法。云何知彼是增上慢為斷此疑。如經若有比丘實得阿羅漢者若不信是法無有是處如是等故。云何堪說者。從佛聞法而起謗心。如來應是不堪說人云何不成不堪說人為斷此疑。如經除佛滅度後現前無佛如是等故。云何如來不成妄語者。此以如來先說法異今說法異。云何如來不成妄語為斷此疑。如經舍利弗汝等應當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故。」【T.26 p.7 脚註③】「以 = 已㊦㊦\*」(T.26 no.1519 p.7c, ll.10-26) とある。
- (63) 『法華問答』には「(80) 問。云何名五濁。何者是五濁 答。濁亂不清淨名之為濁。濁義不同有其五。經一劫二煩惱三眾生四見五命。劫者時也。劫中有為濁故曰劫濁。煩惱者令四住他門名煩惱。煩惱迷心名為煩惱濁。衆勞亂行人名為煩惱濁。法成生名眾生濁。邪見決斷名為見濁。違持色以名之為命體從名命濁五何壽命申天名為命濁。出體者以衣食等命緣為劫濁體。以貪瞋癡三毒為煩惱濁體。以命根為眾生濁體。以五見便為見濁。以命根為體」(T.85 no.2752 p.203b, l.26 - p.203c, l.7) とある。
- (64) 婆藪槃豆造真諦 (CE.499-569) 訳 (CE.563-567) 『阿毘達磨俱舍釋論』卷第九に「何者為五濁。一命濁。二劫濁。三惑濁。四見濁。五眾生濁。下劫將末命等五最麁最下。已成滓故。說名為濁。由前二濁。次第損減壽命。及損減樂具。復由二濁損減助善。何以故。因此二濁。有諸眾生。多修習欲塵樂行及自苦行。能損在家出

- 家助善。由後一濁損減自身身量。色無病力智念正動不動。此德壞故。」(T.29 no. 1559 p.222a, Ⅱ.1-8) と、同箇所が世親造玄奘訳 (CE.651-654) 『阿毘達磨俱舍論』卷第十二には「言五濁者。一壽濁。二劫濁。三煩惱濁。四見濁。五有情濁。劫減將末。壽等鄙下如滓穢故。説名爲濁。由前二濁。如其次第。壽命資具極被衰損。由次二濁。善品衰損。以耽欲樂自苦行故。或損在家出家善故。由後一濁衰損自身。謂壞自身身量色力念智動勇及無病故。」(T.29 no.1558 p.64a, Ⅱ.21-27) とある。また、智顛 (CE.538-597) 説灌頂 (CE.561-632) 記 (CE.584) 『仁王護國般若經疏』卷第五に「即五濁也。一命濁。二劫濁。三煩惱濁。四見濁。五衆生濁。」(T.33 no.1705 p.285c, Ⅱ.3-5) と、良賁 (CE.717-777) 述 (CE.766) 『仁王護國般若波羅蜜多經疏』卷下三に「解曰。言五濁者依俱舍論第十二云。所謂命濁劫濁煩惱濁見濁衆生濁也。」【T.33 p.521 脚註④】「命=今㊦」(T.33 no.1709 p.521a, Ⅱ.13-15) とあって、『論義』に記される五濁の用語及び配列と一致する。なお、『仁王護國般若波羅蜜多經疏』卷下一には「釋本文者。然此品經古德西明寺測法師・玄範法師・紀國寺慧靜法師皆以此品爲流通分。天台智者道安法師・安國<sup>㊦</sup>大法師皆以此品爲正宗分。雖皆諸理俱有所憑。」【T.33 p.494 脚註⑩】「紀=化㊦」【T.33 p.494 脚註⑪】「[大]-㊦」(T.33 no.1709 p.494c, Ⅱ.8-12) と慧淨の名 (異例) を出す。
- (65) 『妙法蓮華經』方便品に「又舍利弗。是諸比丘比丘尼。自謂已得阿羅漢是最後身究竟涅槃。便不復志求阿耨多羅三藐三菩提。當知此輩皆是增上慢人。所以者何。若有比丘實得阿羅漢。若不信此法。無有是處。除佛滅度後現前無佛。所以者何。佛滅度後。如是等經。受持讀誦解義者。是人難得。若遇餘佛。於此法中便得決了。舍利弗。汝等當一心信解受持佛語。諸佛如來言無虛<sup>㊦</sup>妄。無有餘乘唯一佛乘。」【T.9 p.7 脚註⑨】「妄=忘㊦」(T.9 no.262 p.7b, l.29 - p.7c, l.9) とある。
- (66) 「如見烟知火」という文例は、『大智度論』卷六十七に「或性相異如見烟知火烟是火相而非火<sup>㊦</sup>也。」【T.25 p.528 脚註⑫】「[也] - (聖乙) ㊦」(T.25 no.1509 p.528b, l.26) とあるほか、多数の章疏に散見される。
- (67) 『法華問答』には「(11/2-7) 問。經云若比丘實得阿羅漢。若不信此法無有是處。若示一切聲聞皆應授記。云何決定性聲聞阿羅漢而不授記作佛 答。依佛教放生信。自未解故不記。故上文言信佛悟故隨順此經。非已智分即其證也」(T.85 no.2752 p.199b, l.29 - p.199c, l.4) とある。
- (68) 『妙法蓮華經』化城喻品に「我於餘國作佛。更有異名。」(T.9 no.262 p.25c, Ⅱ.16-17) とある。
- (69) 『妙法蓮華經』方便品に「或説<sup>㊦</sup>修多羅 <sup>㊦</sup>伽陀及<sup>㊦</sup>本事 <sup>㊦</sup>本生<sup>㊦</sup>未曾有 亦説於<sup>㊦</sup>因緣 <sup>㊦</sup>譬喻并<sup>㊦</sup>祇夜 <sup>㊦</sup>優<sup>㊦</sup>波提舍經」【T.9 p.7 脚註⑬】「Sūtra。」【T.9 p.7 脚註⑭】「Gāthā。」【T.9 p.7 脚註⑮】「本事 Itivṛttaka。」【T.9 p.7 脚註⑯】「本生 Jātaka。」【T.9 p.7 脚註⑰】「未曾有 Abhuta。」【T.9 p.7 脚註⑱】「因緣 Nidāna。」

【T.9 p.7 脚註①】「譬喩 Aupamyā.」【T.9 p.7 脚註②】「Geya.」【T.9 p.7 脚註③】「Upadeśa.」【T.9 p.7 脚註④】「波=婆」(T.9 no.262 p.7c, ll.25-27) とある。

- (70) 『法華問答』には「(71) 問。方便品中爲小乘人說九部經。十二部中不說何經 答。無授記經。無無自說經。無方廣經」(T.85 no.2752 p.203a, ll.18-20) とある。
- (71) 『阿毘曇毘婆沙論』卷第一に「佛亦如是爲饒益他說十二部經。一修多羅。二祇夜。三婆伽羅那。四伽<sup>○</sup>他。五優陀那。六尼陀那。七阿波陀那。八伊帝<sup>○</sup>目多伽。九闍陀伽。十毘佛略。十一阿浮陀達<sup>○</sup>摩。十二優<sup>○</sup>婆提舍。」【T.28 p.2 脚註①】「他=陀<sup>○</sup>」【T.28 p.2 脚註②】「目=目<sup>○</sup>」【T.28 p.2 脚註③】「摩=磨<sup>○</sup>」【T.28 p.2 脚註④】「婆=波<sup>○</sup>」(T.28 no.1546 p.2b, ll.1-5) と、同箇所が『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第一には「開示演說十二分教。一契經二應頌三記別四諷頌五自說六緣起七譬喩八本事九本生十方廣十一希法十二論議。」とある。また、智顛說灌頂述『妙法蓮華經玄義』卷第六上には「釋法名者。上起教中已說。今標名互有不同。翻譯多異。今依大智論。標名者。一脩多羅。此云法本。亦云契經。亦線經。二祇夜此云重頌。以偈頌脩多羅也。三和伽羅那。此云授記。四伽陀此云不重頌。亦略言偈耳。四句爲頌。如此問詩頌也。五優陀那。此云無問自說。六尼陀那。此云因緣。七阿波陀那。此云譬喩。八伊帝目多伽。此云如是語。亦云本事。九闍陀伽。此云本生。十毘佛略。此云方廣。十一阿浮陀達摩。此云未曾有。十二優波提舍。此云論議。」(T.33 no.1716 p.752c, l.25 - p.753a, l.6) とある。語義解釈は、(水野弘元 [1972] pp.78-86) に詳しい。
- (72) 懷素撰 (CE.682) 『四分律開宗記』卷第一に「第二梵云祇夜 (此云應頌)。以長行中。說義不盡。應更頌釋。名爲應頌。故婆沙云。依前散說契經文句。後結爲頌。而諷誦之。舊云重誦偈。謂以偈文覆誦前法。或曰等誦。義不越本。故名爲等。」(SZ.42 no.735 p.357c, l.22 - p.358a, l.1) と類似する文例が見られる。
- (73) 『四分律開宗記』卷第一に「第九闍陀伽 (此云本生)。所謂自說往報曾爲某類。然佛無當生處故。說生唯本。故婆沙云。謂諸經中。宣說過去所經生事。如熊鹿等。第十毘佛略 (此云方廣。或曰方等)。直說爲方。理弘爲廣。故婆沙云。方廣云何。謂諸經中。廣說種種甚深法義。」(SZ.42 no.735 p.358b, ll.1-5) と類似する文例が見られる。
- (74) 『妙經文句私志記』卷第十二に「此是略明現文九部竟也若十二者更加其謂廣問記梵云毗佛略此云方廣謂語義真正直而廣大爲求無上菩提廣度一切衆故也」(SZ.29 no.596 p.446b, ll.15-18) と類似する文例が見られる。
- (75) 遠法師 (CE.523-592) 撰『大乘義章』卷第一に「第十一者名阿浮陀達摩。此翻名爲未曾有經。<sup>○</sup>青牛行鉢。白狗聽法。諸天身量。大地動等。曠古希奇。名未曾有。說此希事。名未曾有經。」【T.44 p.470 脚註⑤】「涅槃經第十四梵行品」(T.44



紀国寺慧浄の『法華経續述』考(1) (金)

- no.1851 p.470b, ll.5-8) と類似する文例が見られ、同文例が、慧遠述『涅槃義記』卷第五に「阿浮陀達磨者此翻名爲未曾有經。青牛行鉢白狗聽法諸天身量大地動等曠古希奇名未曾有。辯說斯事名未曾有經。」(T.37 no.1764 p.747c, ll.3-6) と、吉藏撰『大乘玄論』卷第五に「未曾有經爲善事。如青牛行鉢白狗聽經大地振動。」(T.45 no.1853 p.64c, ll.28-29) と、『法華義疏』卷第四に「未曾有謂善事。如青牛行鉢白狗聽經大地震動諸天身量。」(T.34 no.1721 p.500b, ll.26-27) とある。
- (76) 世宗 (CE.1397-1450) 二八 (CE.1446) 年に創製され、当初の名称は「訓民正音」という。
- (77) 本書の書名及び刊記のみは、(趙明基 [1959] p.21)・(朴相國 [2001] p.50註(23))にも言及されている。
- (78) 仏宝寺刹通度寺・法宝寺刹海印寺とともに、僧宝寺刹として韓国の三宝寺刹の一つである。
- (79) 国家記録遺産ホームページ [http://www.memorykorea.go.kr:7779/webs/search/view\_seoji.jsp?s\_kdcd=12&s\_asno=02060000&s\_ctcd=00&s\_cnum=0001&pg=1]
- (80) 韓国文化財庁ホームページ【卷一・二】 [http://www.cha.go.kr/korea/heritage/search/Culresult\_Db\_View.jsp?VdkVgwKey=12,02060000,36]【卷五・六】 [http://www.cha.go.kr/korea/heritage/search/Culresult\_Db\_View.jsp?VdkVgwKey=12,14680000,36]
- (81) 僧寶宗刹曹溪叢林松廣寺ホームページ [http://www.songgwangsa.org/community/boardjr.jsp?key=&keyword=&cpagel=&page=&pageper=&board\_no=2486&fid=&gubun=06&yyyymmdd=&yyyymm=&top\_menu\_idx=3&reply\_no=&rtn=]